

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年一月二十五日 印刷
昭和四十三年二月一日発行 (毎月一日発行)
(第二十九号)



No. 29

特集・川柳は患っていないか

二月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、三、五〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



胃痛

胃カイヨウ にも

胃痛なら……

●食事と食事との間の痛み(胃酸過多や胃力
イヨウの場合)、ほか、もたれるような痛
み、ケイレンする痛みなどに、ファイナは、
すぐれた効果を發揮します。
胃カイヨウにも……
●ファイナは、タゲれた胃壁をゼリー状のマ
クでまわり、胃壁を刺激する胃酸過多を制し
●胃を休息させて回復力を早めます。

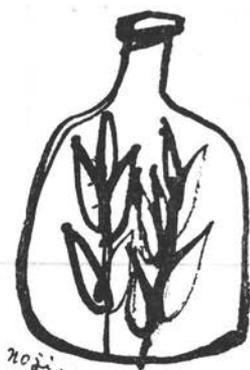


山之内製薬株式会社
東京日本橋本4,2の5

略称
ファイナ
〈ファイナリンソフト〉

除夜の鐘とつくに聞いて晦そば
寝すごしを歌合戦のせいになぜ
貫録見せたつもり父ちゃんの屠蘇の席
ともかくも年の瀬が越えモーニング
お元旦めでたく貸し借りの顔でなし

中島生々庵



今月のことば

長寿でありたいということは人間最大の欲望である。ところがこの頃のように複雑怪奇な——こんな時代を文明開化の社会というふうだが、われらの身辺を見まわすまでもなくいろいろのストレスに巻き込まれ欲求不満に放り出され体も頭も妙な角度にヒン曲って終っている人々ばかりである。その現代人とやらいう人間はこの苦惱解消の秘訣を「くすり」に求める。その機を逸せずメーカーの宣伝は至れりつくせりというわけで殆んど主食のように日々薬剤を用いる人がめっきり多く

なつて来た。
貝原益軒は江戸時代すでにこの事ありと予見してか「補薬のちからたのむべからず」と切言していた。そして飽食暖衣をさけることをやかましく訓えたのであるが、益軒がその当時副腎ホルモン等知るよしもなかったにも拘らず現代医学の教える「ストレス学説」の根本理念に合致するというのである。肉体的にも精神的にも欲望をおさえ困難なことを耐え忍ぶ」のが長寿の秘訣であると「養生訓」は教えるのである。

川柳塔二月号

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選(4)

道のけわしさ……………川村好郎(2)

「川柳」の呼称の由来……………東野大八(20)

近詠……………麻生葭乃(27)

川傍柳初篇研究……………(五十六)……………(18)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤梅志(28)

豊臣秀吉……………(三)……………富士野鞍馬(40)

全出席十五年をかえりみて……………傍島静馬(42)

痴盲録……………高鷲亜鈍(39)

私論・柳論

道のけわしさ

早や二月、言うまでもなく、この季節は我々人間だけでなく、この生物にとって都合のよい時季ではない。草木は姿を変え、鳥やけものも居場所を移し、冬眠に入っている。二月は「逃げる」と云って商売も伸び悩む。その中で一方には寒風にさらされ美しい花をほこらしげに見せる木もあり、その鮮かな彩に引きつけられ、木の実をついばむ小鳥さえ見られる。寒気厳しい地域にそこを生活の場として農業水産に努力している人もある。

五十年の舞台生活をつづけている水谷八重子の回顧録に我々川柳に志すものに教えられるものがある。芸の上に何度も行きつづまり、厚い壁にぶつかった時がある。そういう苦労は、その時は苦しいが本当は苦しみながら楽しんでいくので、そういうことを体験しなければ情性におちいると、苦惱を修行として受けている事を述べて

川柳は患っていないか

— 同人特集

早川 清生・若本多久志・
橘高 薫風・戸田 古方・

近 作 柳 樽

川村好郎選……………(30)

句会出席二五三回達成……………

山 田 季 賛……………(45)

理事長抱腹絶倒記……………

本 田 恵 二 朗……………(43)

初 步 教 室

菊沢小松園……………(44)

水谷鮎美追悼句会……………

長谷川 三 司……………(56)

盲目抄と名花二輪……………

福 井 野 迷 路……………(43)

大 萬 川 柳「乗り気」……………

清 水 白 柳 選……………(48)

★ 柳 界 展 望……………

(薫 風)……………(50)

★ 本 社 新 春 句 会……………

(麻 佑)……………(52)

★ 各 地 柳 壇……………

(文 秋)……………(58)

「 雪 」……………

森 本 法 泉 子 選……………(46)

一 路 集 「 難 題 」……………

有 働 芳 仙 選……………(46)

「 娘 」……………

富 岡 淡 舟 選……………(47)

★ 編 集 後 記……………(白柳・二三夫)……………(64)

いる。特別の役を演ずるときは、

進んで見学に出掛け、或時は京都

島原に一晚泊り込んで見学したこ

ともあるという。就寝前浴室で裸

体になって十分から十五分の体操

することを日課としている。全身

の筋をのばしておく、翌日の身

のこなし方が案であるという。

六代目尾上菊五郎が掃宅の途中

屋台のおでん屋を見かけ、素人の

ふりしてそこへ立ち寄り、盃をか

たむけながら酔っぱらいの状況を

観察したそう、舞台を離れた時

もその芸を研ぐことを忘れなかつ

た。

裸の木も決して枯れていない。

冬眠の蛇も蛙も死んでいない、ジ

ツと堪えて英気を養い、春を待つ

ているのである。

川柳家ももっと勉強せねばなら

ない。ただ作句することばかり考

えていてどうして佳句が生まれ

よう。中味の無い糊のチューブを

いくらしばっても糊は出てこない

あらゆる本を読もう、世相を凝

視しよう。地を肥やそう。

(川 村 好 郎)

川柳塔

中島生々庵選

大阪市 大坂 形水

嫁を連れ海を渡って行く墓参

大阪にない故郷の磯魚

カラーテレビ置いて読書に遠ざかり

妙な色流行り玄人戸惑えり

定年期怒る心を失くしてい

岸和田市 内藤 きさ子

わらぶきと添うてうれしい柿の色

秋の山赤銅色に陽をはじき

ヘアピースの親切白髪も交せてあり

理想像は女であった宝塚

女教師として控え目なイヤリング

大阪市 木村 水洞

明治村西郷どんに出逢いそう

喧嘩した娘へ婿が迎えに来

本年も敷かれっぱなしで恙がなく

やけくそで糸を垂れてる十二月

年の瀬は妻に委せているざる碁

大阪市 橘 高薫 風

青年の歌なまぬるきお元日

元日の冬濤を率て逢いにくる

汝が祈りふかからしむと雪を給う

天使と同じ羽根でクリスマスカードが着く

立ちたくて立ちたくて蛇木に登り

熊本県 有 働 芳 仙

廻れ右すれば足跡消えて居た

下駄の齒につまった雪はけとばされ

気がつけば一人になってた梯子酒

公憤を妻はにこにこ聞いてくれ
飯時をねらわれている十二月

大阪市 正本水客

滝坂の道(奈良)

昔の行き来が息づいている陽がこぼれ

昔の人の足跡に重ねて歩く

夕日観音 愁いのかげを岩肌に

三尊仏 大岩壁に陽をこぼむ

挫折感を入り陽のなかに拌みしや

倉敷市 野田素身郎

ジングルベル喧し今年は失業中

何千円も飲んで土産は小さい折

せめてもの情け故郷に近い左遷の地

これきりというのに女泣きもせず

おとぼけでいけと社長から秘策

出雲市 尼 緑之助

史上最高などと師走を追い上げる

帰省した子も手伝わせ大晦日

湯豆腐に背を丸めてウマがあい

人みんな善なり向い合ったとき

バイバイで別れ大事なことを言いそびれ

青森市 工藤甲吉

より合って夫婦は長い縄となる

あまりいい風ではないが娑婆の風

おふくろとここがつながるヘソをなで

ガツガツと牙を鳴らして冬はくる

オホーツクに思いをはせる凍魚の目

高槻市 傍島静馬

郊外は落葉 街に紙屑焚くけむり

十二月キャッシュで払い拌まれる

惜しまれて市電はバスに世をゆずる

利子で食う人にも勤労感謝の日

玄関に家庭の縮図見る思い

倉敷市 本田恵二朗

三百六十五日目を酔いつぶれ

欠札のおわび七円で済ませとき

忘れてた初心を或る日思い出し

息抜きに栓抜きが要るパパである

電話料高うつきます婚約期

岡山市 服部十九平

大空をみあげて沈んだ かいつぶり

先生が一番疲れた実習日

酔漢が自働扉にからかわれ

遅しい遺児忠霊塔を睨みつけ

虚礼でも汚職でもない歳暮受く

香川県 三井 醉夢

血迷うた恋からさめて急に老け

みれんから酒に溺れたいくじなし

アル中にさせた女をまだおもひ

借る話出来て一息十二月

物価高歳暮くるくるまわされる

大阪市 不二田一三夫

うつむいた同士ぶつかる十二月

大病に助かり交通事故で死に

寄席(三句)

ひよんなとこで笑われカンを狂わされ

女漫才楽屋で衣裳くらべあい

師のネタをこじやこじやもろて初舞台

京都府 大鶴 喜由

雑談の中にも一本筋があり

女の気女に聞けば無理という

鈴なりの柿を撮るのに雲を待ち

待ち呆け同士が歩くことになり

岡山県 直原 七面山

泡立たぬビールにも似て娘も三十路

口を閉ざして癌と対決

のろまのお蔭で九死に一生

乳房に搦む眼の熱気

大阪市 金井 文秋

不細工を売って漫才飯が食え

信念に生きてるはずが易に立ち

心臓を押さえボクシングに夢中

新刊がもうはいったかと読んで去に

大阪市 山川 阿茶

さびつかぬように体操方歩計

淋しいかと自分自身に問いつめる

腹立てて明治生れのズレかいな

阿呆らしい健保の算術十二月

鳥取市 河村 日満

会長の逝去に(二句)

夢に生きぬいて悔なき正四位

弔辞捧呈低く私の名がひびき

母を憶う(一句)

降っていたなと葬式の日を語る

月に空気があるというからそう信じ

岡山県 浜田 久米雄

としよりに四温の朝の陽がまぶし

にわとりが生んで元旦明けてゆく

孫の耳入れ齒の音を聞きとがめ
発言をやめにするのも年のせい

門真市 福島 鉄 児

長生きをしてとはためる気の二号

特価品の奥に高級品ズラリ

老いてなお子に従がわぬ母達者

イミテーション虚栄もろくも崩れ落つ

大阪市 西 森 花 村

隙間風白刃と同じはばて来る

特価品の戦果食堂でパーになり

禁酒して酒のCM腹が立ち

七転び八転びスキー足を折り

大阪市 本 多 柳 志

信号へ吉日らしい荷もつづき

灯を消せばベッドタウンは虫が鳴き

べんちゃらも添えて寸志を握らされ

竜泉寺吟行

堂前の奇瑞の水に鮒が跳ね

大阪市 天 正 千 梢

人ぎらい秋ともなれば人を恋ひ

精一っぱい働き大の字に寝てるなり

還暦の翼へ妻子かかえ込み

三歳の反抗頭搔く事覚え

高槻市 若 柳 潮 花

猫に櫛かけて女に暇があり

愛情の尺度を計る嘘をつき

酒逃げてお好み焼へついてゆき

逃げてゆく若さへすがる髪を染め

松江市 中 川 晃 男

世話好きな夫婦で今日もすれ違い

つけまつ毛見せた涙が引っかかり

残業の鞆ネオンをくぐり抜け

「黙ってて」妻編物の目を数え

岡山市 横 山 一 声

ボーナスの出た日募金がことわれず

豊作でしようとセールス動かない

酒の出るとこへはかがさない男

松の内飲まねばならぬことばかり

伊丹市 小 川 静 観 堂

牛乳は大臣賞のひよわい児

やり繰りを知らせず知らず炬燵に居

名士税とおもて呉れとは何ぬかず

明治百年世は元禄となりけり

新年(二句)

名古屋市 吉田水車

大阪市 西出一栄

世の中がどうあろうとも夫笑婦和
かくし芸たしかに何かやって居り
のど自慢司会者だけが賞めてくれ
師走風俺れも枯れ葉ももろ共に

岡山県 浜野奇童

人生行路古稀の駅にぞ着きにけり
釣りに行く朝は自分で茶を湧かし
年玉へ孫七人に取巻かれ
手放しの大きなあくび見てしまい

室戸市 奴田原紅雨

すごろくを待つ間も母の手内職
もう選挙あります四角な賀状くる

旅(二句)

バスガイドの声うるませた事故現場
はっきりと視線を意識してるミニ

下関市 桜川不水

仏壇をせめて味方に祖母は生き
朝風呂を焚くとき妻よ倅せか
ご破算で願いますは小笠原
ヒモをみなほどいてしまいうヒモが来る

大阪市 室谷鉄舟

除夜の鐘嫋嫋紀元あらたまり
腰を正して酌まん七十歳の春

田五作も自適といえば聞こえよし
たそがれて風なし落ち葉音になり

豊中市 戸田古方

秋田犬主人を散歩させている
皿洗う音で我が家の気圧読む
金のない音響かせて風呂急ぐ
歪んだがよくも退院出来た肺

宝塚市 小島無聖

それからほめられている散り紅葉
楽しんでみたい苦労はしたたもの
舌づつみ打つ猫の目と出合い

ほんとうの愛を忘れてうれしがり

逢いたさが見舞に花を提げて訪い
里の色昔まんまの掘り炬燵
かけ蒲団一人に惜しいダブル巾
羽ばたいたやつが今夜の鍋に煮え

兵庫県 大江秋月

内職をしてから寝付き早うなり

この御恩忘れませんと借りてくる

正月も妻は一ばん早く起き

今治市 越智 一水

健康なからだ愉快に腹が空き

恋だなど女の歩巾からわかり

倅せな友がしゃべりに途中下車

世をすねた女が男料理する

富田林市 川端 東雲楼

妻と末っ娘とそのみどり子相ついで逝く

忘れよは無理ひとり寝の夜のしじま

正濁あわせのみ正邪かみしめる

邪魔者といえず古老と奉つり

支払に追われ集金には疲れ

倉敷市 水粉 千翁

もう切れる切るとは埒のあかぬ仲

連想の詩あり尼僧うら若し

指折ればあの日は遠く近くなり

虫干しへ明治の穴がなつかしい

京都市 都倉 求女

バスぐらいには本願寺の鳩飛びたたず

なべやきの温さへ無口ほぐれかけ

安売りのバナナは安いように食べ

スト声明長がなが誰が読むものか

京都市 松川 杜的

文化住宅ビエロのように老夫婦

モスリンの針山がある祖母の部屋

等間隔で面影俺を去って行く

参考のためにダイヤの値も見とく

岡山県 藤原 秋月

寒風へ下戸も覗いてみる屋台

電話口きれいな嘘にまとめとり

予め決ってるのにする選挙

借用証ペン字一級とは言わず

兵庫県 河原 みのる

ひとさまに見せるためかや菊づくり

死なはったゲナで片付く僕ならん

飛び石連休(二句)

三日間病氣するなと診療所

温泉で何を研修するのやら

大阪市 河井 庸佑

頭から足までざっと見積られ

就職へコネの弱さが気にかかる

栄転の噂へ何だかおちつかず

これ以上浪人できぬ春が来る

岡山市 江 国 幽 谷

蓑虫よ落ちずに家を曳いて行け
梅の花すっぱい実がなるとは見えず

ひまやなと思えば電話故障なり
看護婦に棄てた薬を見つけれ

諫早市 川 岡 靈 眼 子

秋一步豆腐屋いつもの朝を来る
日溜りの欠伸隣に移し合い

上京(二句)

東京で江戸と昭和を見て廻り
妻の内職に加勢する弱さ

鳥取県 森 田 布 堂

焼芋屋師走の風にいて笑顔
手の筋が話題土工の日向ぼこ
大つらら屋根を支えて村静か
出稼ぎの帰らぬ家も餅は搗き

ハワイ 築 山 快 夢 起

プラカード不満の声が並んどり
隠退はただ過ぎ去った夢に生き
寝言までシングルベルを歌う孫
名刺から話題がはずむ汽車の旅

旭区医師会鹿野園忘年会にて

大阪市 川 口 弘 生

今年また無芸のままの忘年会

祠にも素通り出来ぬ明治者

耳鼻科医会東上陳情行

政治とは待つ事なりとまず覚え

頰杖の小指を噛みて母思ふ

倉吉市 奥 谷 弘 朗

ボーナスがネオンの街をぬけて着き

配慮とは人をごまかす手と気付き

科学には弱い男で口は立ち

筋書きで行けばとくに家が建ち

鳥根県 藤 井 明 朗

川で物洗うのどかな町に住み

荷物の手替えて信号待つ師走

十二月狂騒曲も動じない

女店員もて余してゐる女連れ

大阪市 福 井 多 蘭 子

蝶々雄二ふと真実のことに触れ

この壺に人のいのちがある古墳

稽古して来たに名指しのない小唄

あわれ造花の小鳥雨に濡れ

東大阪市 久米奈良子

むきあえば素直にとける角砂糖

海すでに暮れて覚悟のもやい舟

夢さめしことば刃の冷やかさ

おもわくのずれる意識へ落葉ふむ

堺市 新谷笑痴

龍泉寺吟行

喰べられぬ烏瓜にも秋の色

枝つきの柿と眠るも里のバス

金八川柳一周年に招かれて

一年を句会で埋めて悔がなし

支払えばちぎって捨てる請求書

竹原市 山内静水

童心に還る日ポーナスを掌に

呼び止めて白髪一本抜いてくれ

掌をとれば昔むかしの事でした

菊活ける子がいて貧しさ忘れさせ

守口市 羽原静歩

よろこびは花と小鳥と潮騒と

さばさばと別れて来ても思い出し

実印をペタペタ捺してこんな金

心機一転パチンコ屋ですって来る

小松市 関戸宗太郎

老人病ばかりで活気のない干場

やせこけた顔を鏡がまだゆがめ

げっそりと検査でやせてから手術

鼻の管抜けて空気を嘔みしめる

富田林市 岩田美代

いちぶ始終唯聞いてやり注いでやり

あの裏に此の裏あつたを読めなんだ

晩秋を恋う人もなくねるとする

反応を楽しむ言葉さりげなく

竹原市 小島蘭幸

人生は楽し僕でも恋をする

二人きり視線合わせぬようにする

好きですと言えば好きよと言ってくれ

長男に夢あり困ったことになり

堺市 高橋千万子

ポチ袋あの孫この孫しるしつけ

おだんに小銭なくて出ししぶり

丁寧にしまったためにまに合わず

潮時をうまく合わして気に入られ

八代市 佐野ト占

堅い席抜けて気楽な縄のれん

三次会まではおぼろに浮んで来
悪友を人質にして三次会

鳥取県 清水 一保

愛情も小包にして年の暮れ

山男はれはれと仰ぐ雪化粧

生き抜いた甲斐つくづくと初日の出

下関市 国 弘 半 休

工夫すりゃアーなんとかならうと約手きる

和服の娘さんが席を譲って呉れた

お靴を足で受取り宿を立つ

倉敷市 木村 長 三

限界が来たなと思う夜の長さ

わがままなところに体ついてこず

ゆく秋のなごりを惜しむ座り椅子

藤井寺市 西 いわを

親切な女心を履き違え

真剣に惚れたら罪な人と言う

柿熟れて野鳥を友とする齡

大阪市 児島 与 呂 志

職場の庭 (三句)

みどりみどりみどり大阪城に朝が明け

この石にうらみ悲しみ大阪城

ぼんやりと大阪城の午後を待つ

大阪市 市場 没 食 子

税金に払おか接待費として飲もか

幹事一任拍手々々で飲み急ぎ

喰うてチョンたっしやで逝く年迎う年

西宮市 若林 草 右

もう秋とヤブ蚊短気に肌をさし

リベートで回転椅子はよく廻り

あの手この手寺はプールでよく儲け

大阪市 田中 十 方

ポーナスを妻当選の顔でとり

寝過ぎた朝スモッグにたすけられ

弔 森本良夫君

癌ですと言えないままに君は逝き

岡山市 田村 藤 波

結婚が話題離婚がまた話題

トラブルを洗えばボスが浮きあがり

ご祈禱が効かず寿命だと論し

神戸市 仲 どんたく

銀狐似合う女が乗る芦屋

押し屋と云うアルバイトあり柔道部

ジングルベルワイフへ云いわけ練りながら

大阪市 今西章雅

写真屋が新婦の裾までさわりに来

宮仕えもいいなと思う十二月

一丁の豆腐でも足る差向い

高石市 谷沢好祐

計らずもなどと新大臣が出来

小魚を食って鯨のよく太り

音に聞く高師の浜は埋立地

芦屋市 丸川初甫

寝言はつきりし過ぎてこわくなり

時間ばかり気にして附添の暇

スキヤンダル読んでパーマの時間待ち

呉市 林野甦光

あけましてつもごりそばが残って

腕組んでいるけど高の知れた智恵

長い目で見えて貰いたい通信簿

大阪市 水谷竹荘

手品のけいここっそりするも十二月

売れ妓は酌ぐだけついでもう居らず

予算にはない二次会の請求書

出雲市 原独仙

じっとして居れぬは永い勤め癖

ひねくれて育つ盆栽よろこばれ
編物の母へよい子の肩叩き

高槻市 山田季賛

自動ハカリゆうずうきかぬ針の位置

あの日があった過去を思い出し

祖母が故郷の黒砂糖を賞め

大阪市 福井野迷路

剩さえ長生きしようとは身勝手な

尺貫で明治同士の水いらす

交通禍今日も無事とて脚撫ぜる

鳥取市 森本法泉水

松江にて

大橋は下駄で渡った頃がよし

宍道湖畔

有料道路河童は遊ぶとこがなし

松江中学同期生会

特急に風呂敷包みは僕一人

岡山県 大森娛句楽

明日有りと思うて今日の大晦日

老らくの恋古疵が乱熟し

一粒が万倍になる種を蒔き

兵庫縣 遠山可住

財成って今宗教にたどりつき

来年のことまで愚痴の種にして

来年へ母母なりの気がはずみ

美弥市 安平次弘道

偶然を偶然と見ぬ目が恐い

影引きずってマラソンのビリが着き

この時化へ船を出すのも十二月

岡山縣 池田古心

平年作それが不作になる豊年

へソ曲り釘にもありきヒソ曲り

居眠ってならぬ眠気の鼻毛抜く

鳥取市 藤本礎山

又今日が有る喜びの大地踏む

百にあと四十年と気が強い

這いハイが客間へ笑いはこび込み

松江市 岡崎祥月

師走 師走 俺の足跡

ダンブパー思う存分土をかけ

十二月同じことをくり返し

枚方市 宮川珠笑

雇われ講師わかる人だけ聞きなさい

泣きじゃくり寝る子に撲った手を添える

末っ子のおねしょ家中起こされる

平田市 久家代仕男

好物が出てから入歯邪魔になり

しぶちんに寄附とは妙な言いがかり

鑑戸を下ろし裏から釣りに抜け

姫路市 隠岐不醉

いやらしい白髪染めてどうする気

手を引いて負うて抱えてまだ腹に

我が年を子供に聞いて不審そう

大阪市 宮尾あいき

ねずみ一匹取れぬくせして猫の恋

畑の土小芋と同じ値で買われ

クリスマス煙突ない家孫不安

和歌山市 野村太茂津

秘書室を通せば利き目うすくなり

同窓会皆どんぐりで意気上る

自らの鍵で自分を孤独にし

大阪市 中川滋雀

本能に負けフーテンの眼がきれい

憎いほど好み見抜いてきた歳暮

言い勝った紫煙はゆっくり立ち昇り

射とめては走る捕鯨の旗印

大豊作成年式の娘を飾り

伺書出せば上司の盲目判

八代市 永松道雄
大阪市 西川誓二

腑甲斐無い親と恨むな年の暮

空いた席坐れば次が降りる駅

吉日やと云うて出た旅仇となり

京都府 清水谷 句楽坊

さらさらと珠数行く年を感謝して

充ちたりし年送る鐘老いの手で

栄光も苦惱も夢にはや八十路

和歌山市 土谷城石

よく燃える火事へオーバー着に戻り

物価高柿は畠へ放つとかれ

やめた娘が元の売場へ来て値切る

和歌山市 西尾公作

ガムかんで戸籍課死亡届け受け

説明の他は存せぬバスガイド

砂丘見物馬にあんじょう案内され

大阪市 碑 弓彦

歳末へ糸を垂れてる別世界

墨の香も大安吉日らしい朝

道掘って掘って都会は変りゆく

ハワイ 上田紅溪

食前の祈り待たれぬつまみ食い

妻と子を残し自動車持って逝き

パートタイム夫婦仲よく共稼ぎ

倉敷市 井上旭峯

智恵の輪へ智恵のある子が笑ってる

くつろぎが毒になつてゐる働き手

ぎりぎりへ妻ととときの智恵を出し

笠岡市 木山要次

死んで行く身にも火葬は熱かろう

先月の赤字を埋めるエンヤコウリヤ

あれこれと病の知識知る不幸

ハワイ 羽佐間柳葉

宣伝をする宣伝も金が必要

一目惚れ癩癩持ちと知らなんだ

親切な言葉世辞でも気が和む

泉大津市 高津徹也

鏡台へ姑としての愚痴となる

花だより末の娘も嫁っっちゃい

金言を一つ仕入れて訓辞する

竹原市 杉原愛鳩

なめくじは一夜思案の壁のあと

老夫婦孫の来ている笑い声
欠点がおそろしい程俺に似る

桜井市 岩本雀踊子

ハッキリと云えばお金がないのなり

無駄使いしろと福引券がつき

なるようになる世の中だ宵ねする

笠岡市 松本忠三

アイデアを買われただけで没にされ

八つ当りバトンタッチのようにされ

新年の抱負炬燵で代筆し

奈良市 宮口笛生

順番に参らせ候棺出る

ぎっしりと宇宙もつまる星の数

胃散過多大根おろしのうまい朝

新居浜市 近藤凡生

ひんやりと地下足袋初冬を告げて居る

つれづれに落葉燃せば秋の影

過去洗う心の隅の男なき

加賀市 木村一路

敷かれてる事に気付いた十年目

吾孤独四角い升の中に座す

愛媛県 渡辺曉童

山茶花の白さにせめてやすらげう

山茶花に冬をまかしたわびずまい

福岡県 太田湖平

金婚へ贈る胃散とサロンパス

六道の六文銭も書き送り

宝塚市 中村ゆきを

返すあてあるかにあてないのが怒り

求人難ナメた答が返って来

松江市 柳楽鶴丸

口はわざわざいのもと無口でも困り

サラリーノ事など忘れる楽しい日

熊本市 楠田英子

反応を予期しすねてるように見え

画をかけば主婦の座忘れたまま過し

小松市 馬場魚山

停電が出来そこないの飯にする

正月へあやぶくなって来た禁酒

これ以上貸せぬと質草つき返えし

大阪市 宮地双楽

大和路の時雨楽しむ趣味の友

流行へ婦長も白衣の裾縮め

香川県 岡田拳法

捨てる親と中絶してる親

捨てる親と中絶してる親

和泉市 西岡洛醉

妻の座を守る指先ひび割れて
後家になりやどうするかと妬いて見る

泉佐野市 大工陸夫

停年は酒と拍手で追い出され
餠餅の好意も義歯に戴けず

加賀市 細呂木魯木

戦友と会えば満洲が生きている
結婚の予算へ取りくむ娘は成人

堺市 青野遊仙

老妻をおだてて使うコツも年
半人前働けぬ身を焦る暮

川村好郎

★
東京の銀座が見たら泣く銀座
命あるよるこび年越しそばする

居たい人帰りたいひと通夜の席
捨てたい残したい机辺年暮るる

はねるときあらん冬の鯉堪ゆる

西尾 栗

午前様になれぬを妻と笑う齡
古妻のおなら段々大きなり

起きる時間へ炬燵の温さ良い加減
ハイヒールの背のびだけ撮してキッス

街録の吃りと知ったあわてよう

北川春巢

泣き言をいわずに三カ日が暮れ
年賀状の整理終らぬまま二月

地下鉄の工事二月の音となり

トラックの世辞を嫁の荷聞いている

犬病院暖房をして客を持ち

若本多久志

晩秋の嵯峨野を訪う

直指庵簾下暗をなつかしみ

さりげなく去来の墓に敷く落葉

嫁がせて心安けき十二月

ご老体などとは俺の気も知らず

感覚が少しずれてるとは悟り

菊沢小松園

真っ盛りの姿で造花捨てられる

墓石に掛ける水さえ冬の色

手に掬う水に夜空の星の影

ただ一人の他は人間嫌いななり

新年の抱負を留置場で書き

清水白柳

梯子酒女将叱っていて飲ませ

小走りにあるく看護婦何か持ち

両替えとわかる切符の次で待ち

川傍柳 初篇研究

(五十六)

前田喜代人 川端柳風
 岡崎重義 高須唾三味故
 清博美丸 十府
 藤井和雄 岡田甫

464 琴を直して嫁を引っぱって来る

葉十

藤井||琴といえは嫁と古川柳ではつきもの、恥かしがって爪をはめない嫁を無理に引っぱって来て、すぐ弾ぜられるように直して準備完了の琴の前にいやおうなしに坐らせた。

嫁の琴ちかしい客へ馳走にし 二・39
 の句のように引っ張ってきたのは嫁自慢の舅かもしれない。

高須||琴を直してがちょっとまい。嫁自慢に間違いないが、こういう教養のある嫁はやっぱりよい家から来た嫁で、多少次句と関連ありと見たい。

清||琴を直しては音程を正しくしての意か。

丸||琴を直しては礎稿のように弾きよいようにしてぐらいの意と見る。引っぱってくのは新郎の友だちだろう。

岡田||「直して」は正しく置くこと。こ

465 持て来た嫁いやな事いやといふ
 意。ここでは琴の袋をはずして座敷にすえて…の

一 甫

藤井||持て来たとは持参金のこと。持参金の威光で賀殿の要求などはいやな時は今夜はいやとはっきりいう。おそらく瓜ざね顔にあらで袖ざね顔の嫁であろうか。川柳では持参金付きの嫁をもらった賀殿ほどみじめなものはない。

持参のつくを一目見ていやといふ 二〇・26
 と云っておけばよかったと後悔したことだろう。その他持参金の句に

持参金嫁なけなしの鼻にかけ 七・29
 持参金痘痕多少わりが有り 八・38
 持参金買はぬむす子へむごい事 八・35

川端||賛。普通ならはじらいを見せるのだが、そういう可愛気は持参金付きの嫁には見られない。

高須||たとえは「琴を直して」お客様に

一曲御馳走にと云つても「あんななんにも判らない人になんか、いやです」と率直に云えるのは持って来た嫁だからというわけ
 前田||礎稿に賛。「いやな事いやといふ」はうまい。

丸・岡田||同。

葉十

466 よくすればするほどげびる三会め
 藤井||げびるがこの句の問題点だ。自信がないが私は次のように解してみた。三会目になると女郎のうちけた親身のサーブスもありがたいが、あまり過剰になると下品になってゲップが出る。サーブスも程々こそよけれどという戒めではなかるうか。女房たるものの閨房訓に如何に馴れ合った夫婦仲でも、常に恥かしさこそ忘るべからずとある。男たるもの心すべき事にこそ

か。駄労解でなければ幸。
 川端||金銭ではなく、行為によるサーブスがよければよいほど下品に見える。

三会目から人柄がぐつと落ち
三会目杓子当りが別になり 拾七・28
高須||三会目の古句はいやになるほどあ
る。

三会目ちつとは女郎買ったよう 一七・18
三会目には正体をあらわせる 三〇・25
見識も着も崩す三会目 二九・10
三会目心のしれた帯をとき 七・18
帯紐をといて付き合う三会目 一八・40

助平の傾城の出る三会目 二〇・32
寝なんすつめりいすつ三会目管 一・9
三会目あためられつあためつ四一・8
三会目ようやく女郎買ったよう 一九・25
で、女郎も「下卑る」(いやしく見える)
のである。

前田||川端説をとる。その上飲食にも下
卑てくる。

丸||江戸の女郎は張りでもつ。そこが江
戸子の買いどころ。向からサービス過剰で
は「下卑る」わけ。

岡田||同。
467 三味線をそふでハ無ひと瓜で弾

秋 紅

藤井||三味線の稽古中の娘の傍で「ま、
一寸まって、そこはちがってる、三味線
貸して御覧ね」と爪弾でチントンシャンと
教えているところ。昔とった杵柄の母親と
した方がほえましくなると思うが、。お
師匠さんでは平凡だと思ふ。

川端||嫁の遊芸は主として琴であり、三

味線は姑であるから

三味線を嫁の体へ立てかける
三味線を嫁うっかりと膝へ取り 一〇・17
から、姑が三味線で嫁をいじめている様子
であらう。

高須||三味線の稽古風景でよいと思うが
その撥でひいている人間と「そこは違う」
と、爪でひいてみせる人間とは、いろいろ
考えられよう。

三味の弟子七人去ってなめたがり二三・3
三味の弟子破門の訳は師をくどき 七・24
なんともあるから、ユダン出来ない。

丸||高須説の如くこの両人はいろいろに
考えられる。ただし「そうではない」とい
う語気から見て師弟の間ではなく、姉妹か
母娘のように思われる。

岡田||同。家庭内の風景。当時は、良家
の子女は琴、庶民の娘は三味線が遊芸の主
であった。

468 小鍋だてにへ切らぬ内みんな喰

葉 十

藤井||「たて」は接尾語で形容詞の語幹
及び名詞または動詞の名詞形につけてその
意味を強めるために使われる。例「忠義だ
て」のように。従ってここでは鍋が小さい
から箸のピッチの方が急で煮え切らぬ半煮
えのままみんな喰ってしまった意。牛鍋を
箸でつつき合った学生時代を思い出す。

高須||この小鍋立は小さい鍋で物を煮な
がら、手軽く食事をする料理法で、忠義だ

(接尾語)とは違う。

小鍋だてうたたねをして食ひはぐり
という句もあり、鍋の小さいということよ
り家庭的ということとで、由来「さしむか
い」に適したもとして悦ばれた。現代な
ら「すき焼の丁度いい頃肉はなし」とい
うところである。諸君にもおぼえがおありで
あらう。

前田||小鍋だては前説の通り。吉原など
の通人が女郎と二人差向いで火鉢にかけ煮
物をしながら食べた。小鍋に使ったのは、
土鍋のほかに帆立貝があった。

生煮なうちになくなる小鍋立 二〇・28
丸・岡田||同。

高級洋菓子

PT-S

堺市役所前 TEL(2)2334

「川柳」呼称の由来

東野 大八

戦傷で隻手となり、栄養失調でシャモみた
いな貌で、敗戦日本の土を踏むべく、L S T
(米軍の上陸用舟艇)の船底で

「帰りなんいざ、田園まさにブせん」とす
の陶淵明の「帰去来の辞」を私は痛いほど胸
中でくり返した。

帰国して寺の位碑堂に住んだ折、住職が数
冊の唐詩選を貸してくれた。熟読十数度。そ
して二十年経過した今日、父の故本に淵明を
見出し、またぞろそれをくり返しているう
ち、ふと柄井八右衛門の柳号「川柳」とい
うのは、淵明の戯作「五柳先生」の章から発想
されたのではないか、と思ひ当った。

では、早速に川柳古本と、淵明をめぐる唐
詩選社中の各資料をくって、確信つけられた
その傍証固めに入ることにしよう。
陶淵明一名は潜、字名は元亮。西歴三六五
年(東晋の哀帝の興寧三年)江蘇省潯陽に生

まれた。十二歳で父と死別、二十歳で仕官し
てのち野に下り、友人劉裕が皇帝になったの
が縁で三十歳で再仕官。だが、門閥が栄達の
絶対条件のため、イヤ気がさして野に戻った
のが四十過ぎ。「帰去来」はその官職を捨て
た際の心境を詠んだものだ。

母と実妹と妻(後妻)五人の子を抱えた彼
の百姓生活は苦しい。愛する妹や母を次々失
い、失火して家を焼いたり五人の子はすべて
人並ではない。かくて彼の生活上の何よりの
慰めは、酒と詩作であったが、彼の作品は百
三十篇に過ぎない。かくて自らを祭る文を残
して六十三歳で死んだ。

淵明の酒は、独酒独吟である。斗酒百篇の
李白は、酒の相手がいなければ飲めなかつた
が、彼の酒友は柳と菊と竹である。

「酒有り、閑に飲んで自ら欲然」「春酒を
酌み わが園中の菰を摘む」酒境である。

酒徒淵明の酔中の名作は「桃花源」だが、
彼を慕う後世の詩人は、彼の「五柳先生の
伝」を誰しも推賞した。その連中が酒を好ん
だからであろう。五柳先生は、淵明が詩に托
したいわば彼の自画像である。

「先生はいずれの許の人なるかを知らず、
またその姓字を詳らかにせず、宅辺に五柳樹
ありよって以て号となす、閑静にして言少
く、榮利を慕わず、書を読めども甚しく解せ
んことを求めず、会意ある毎にすなわち欣然
として食を忘る、性酒をたしなむ、家貧にし
て常に得ることあたわず、親旧そのこの如き
を知り……」

とまだ続くのだが、紙幅に障りありて省
く。
彼は、酔うと菊よりも柳を愛した。

「采々たり窓下の蘭密々たり堂前の柳」

「梅柳門をはさみ植ゆ 一条佳花あり」

「柳柳後園をおおい柳李堂前にかかる」

つまり、柳あつての百花の彩りであつて、
そのバックの柳のみどりが、彼の酒興にかな
つたというわけだ。

淵明のファンは、後世に数多いが、「桃は
くれない、柳はみどり」の有名な「田園楽」
を残した王維(六九九)は、淵明を慕う献詩
を盛んに作ったが、詩友裴迪に贈る詩に「狂
歌す五柳の前」をつづり、それが田園楽を生
んだのである。

孟浩然、韋応物、柳宗元、蘇軾なども淵明
への為書の詩章をつづっているが、最も熱狂
的なファンは李白(七〇一)である。「吾見

詩陶君にささぐ」には「柳は深し陶令の宅」といい、さかんに淵明敬慕の作を詠じまくっている。白居易(楽天二七七二)も、李白に劣らぬ淵明ビィキで、淵明の「五柳先生」になぞらえて「醉吟先生」を作っている。

要するに空前絶後の中国文学の盛観を織りなした唐詩選社中は、すべて酒徒で、酔うて砂上にふす、君とがむることなかれの酒興はすべて陶潜に帰し、五柳先生をつねに醉眼に見出しつづけたらしい。

さて、以上で淵明先生の関係分は—まず打ち切り、こんどはお目あての柳界にうつる。

元禄当時は、儒学の全盛期で「吉野山のサクラも切り倒すばかり」の版木の乱作時代であった。中国渡りの一切経をはじめとする仏書、漢学、漢詩、唐詩の中国ムードの移入がしようにつを極めた時代である。この刊行ブームに俳諧、雑俳、俳諧も便乗した中に武玉川が出現した。

寛延三年(一八四一)慶紀逸五十七歳、柄井川柳三十三歳に出た武玉川初篇の序文には「李白杜子美が骨隨を得られてより」と貞徳老後の門人北村季吟が門下芭蕉桃青の正風を語るくだりがみえる。中国詩人の強烈な影響が、如何に俳諧の体質に脈打っていたかは、右の—くだりはじめ、武玉川や柳樽の序文に、随所に顔を出している。

「武玉川九篇などには—淵明の四時分ちて印となし手に弄すること久し」と紀逸の俳号四時庵にコト寄せ「李白桃李園に宴する」などとなり、芭蕉の「桃青」も漢詩の影響で号と

したことを物語っている。

こうしたなかで私の本篇の題名である「川柳」呼称の由来の裏づけとして、最も重視したのが、つぎのくだり、すなわち「川柳初篇の序」がこれである。

「十圍にしてすえ糸のごとくなるものは柳。百尺にして枝葉地を払うものも柳。随代あつた虚空と植ゆれば、陶潜わずか四、五本植ゆ、章台の柳やたらと折れて叱られる。雪中の柳は折れそうにしてよしにする。多き柳のその中に、平生柳の賞すべきは、夕浅草新堀のほとり、川とい柳のことなるべし」

この川柳初篇は柄井川柳六十二歳(安永九年)のとき、牛込御納戸町逢来連が、川柳の月例選句中の月報として出版した。今でいう中央吟社の系列をくむ地方柳誌だともよい。それだけに川柳翁—辺倒で、川叟と奉る序文のあやの中に、川柳その人の人となりがよく顔を出しているのが興味深い。

川柳は五篇で終っているが、その最後の序文の後のくだりが、カンドころだ。

「柄井のおきなきが風流のいたれる綿々としてたえず、たちよる道の柳かげもともりして五もとにおよぶ。されば翁をしてふたたび五柳先生とせん乎。天明三癸卯季夏六月朱楽管江(判)」

—もとよりして終に五もとにおよぶは、この本の五冊という意味合いもあるらしいが、しかし「ふたたび」に私は気をひかれるのである。柄井川柳のこのとき六十六歳、その死に先だつわずか七年の生前にあたる。

当時の江戸は、一面の湿地帯で、霞(あし)と柳が密生してつばめの天地であった。霞原転じて吉原の例もさきながら、武玉川一篇から「燕都枝折」としたのは、江戸転じて一名燕都の俗称によることである。川柳翁の門前にも柳があったとみてよい。

いよいよ結びだが、柄井川柳自身、五株の柳に淵明の故事にことよせ門前の柳五本に俳諧のシャレをよみとった、その心根のカゲにたたくすものは、川柳の柳味に、王維の「狂歌す五柳の前」で、川柳点の俳諧の卑下にわずかながら王維を気負ったことが思われる。特定の文芸に、人名にちなむ呼称を付したユニークな往時のアイデァは、漢調ムードの淵明を引き合いとし、酔中のシャレを五柳先生の遊びに見出したのもごく自然の成り行きともてよい。

ちなみに中国では、柳の一枝を贈ることは、その別れが男女の仲と限られていて、しばしのケツ別こそ、相みでのちに—しおはげしい契りを深めるという、セックスの粹すじに通じている。柳暗花明といえは立所に分明するもの、いわば柳一筋あればこそである。

★ 末摘花にこよなき愛情を抱きつづけた八右衛門先生にすれば「川柳」こそ、また別の意味でわが意を得た趣味の称号ではなかったか、私はそう思われてならないのである。

★

★

★

川柳回復のために栄養と

気迫を

早川清生

詩は感動である。あらゆる芸術と同じく、美的感動こそが詩の本源である。川柳も現代を担う詩の一部門として、まず美に対する崇高な熱望から発しなければならぬ。こういった見地から、各誌に毎月発表されるおびただしい数の川柳をみると、はたして純粹な詩的感動を見出し得るものがどれくらいあるうか。もちろん詩は、そして当然に川柳は、美的感動そのものではなく、作家個々の知的な精神活動を加えて、言葉として定着したものである。ペートーベンの田園は描写でなく表現だといわれる。ここで作家の表現能力が厳正な評価を受けなければならぬ。

現今では川柳の三要素を固執している作家はほとんどないと思われるが、世間ではまだ川柳に安直な格言か気のきいたジョーク程度の認識しかもたない人が多い。これは明治以降の先人たちの努力に見るべきものがあつたにもかかわらず、いまだに「狂句百年の負

債」がかえされていないことを示している。現在の川柳には抒情の導入とともに、人間性の探究が進められてきたものの、概して言えば、私たちの周囲の大部分はなお理論的な根拠のない、日常茶飯事と取り組み、言葉の上の遊びに終始しているのであって、詩性と遠いところで格闘を続けている姿は、残念ながら川柳に対する世間の誤解を肯定する結果をしか生み得ないであろう。

川柳人の多くはまことに無神経かつ楽天的であつて、極言を許されるならば、昔日の浮世床のような雰囲気の中で社交を楽しむ集団である場合すらあつて、現代社会のメカニズムが私たちに強いる虚無的な危機感や不安にはほとんど不感症である。伝統派に普遍的な楽観主義は現状是認の精神であつて、既成の秩序いっさいを否定することによって、生の実感を確かめようとする革新派の基底にあるものなど理解しようとはせず、理由なく畏怖し

たり、一途に拒否して、互いの対話などほとんど稀で、その中から新しい発展が生まれることを妨げている。

現代の詩あるいは川柳が抒情の質を変えつつあることは、私たちが伝統の側に属するとはいえ、現実的に認めざるを得ない。従来は抒情が情緒を自然に流露させるにとどまるのに反し、新しい抒情はゆたかな現代的知性によって思想性を付与され、時には主題を芸術に還元するために直喩や暗喩の手法も採用されて、作品をいっそう難解なものにすることがある。そこにはもう昔日のように感覚的な絵画的な共感を求める川柳はなく、私たちは感じる川柳から、考えてのちに感じる川柳へ移行した姿を見出すかもしれない。しかし現代の複雑な重みに川柳が堪え、かつ短詩形としての永遠の生命を得ようとするならば、私たちはよく現状を把握し、こうした考え方の中から新しい伝統を創り上げる栄養を吸収しなければならぬであろう。

川柳が次代の鑑賞に堪えるためには、第一に作家の高い素質が求められる。どの柳詠のどの頁を開いても、私たちは羅列する作品の中から、ふくよかな知性の香気と豊饒な近代感をもつ作品を選び出すことに著しい困難を感じる。とくに視野のせまさと、社会に対する透徹した洞察を欠きがちなのは、卑俗さ

との訣別をためらっていることともに、作品の価値を決定的に低めているのであって、これは作句以前の問題であろうと思われる。

次に作家に望まれるものは、現代に生きる意義を知ろうとする意欲である。そしてそこから発する鋭い獨創性である。「文明とは九分の借用と一分の獨創である。」という言葉を認めるにしても、なお累々たる摸倣と時代意識の稀薄さに驚く。川柳に新しい境地を開拓するという鮮烈な旗じるしを掲げた革新派

川柳斗病生活

若本多久志

の作品にすら、いつのまにか類型化とモチーフの貧困という腐蝕が始まっているのはどうしたことであろうか。

このような小文では意を尽くすことができず、つい過激と抽象にわたったが、診断するところ川柳の病源は深くそして広い。本誌には主幹ほか刀圭界の重鎮がおられるので、病名と治療法は十分なご高示をお願いすると、死に至る病いとならないうちに回復するようお互いに努めたいと考えている。

こういう課題が出てくる処に、川柳は今なお、思っているのだと思う。

然し思った後に、朗らかな小康があり、これも又、時を経れば懐疑と混迷に陥入って、再び新しい疾患期に入るのではなからうか。

かくて永遠に、糾う縄のように繰り返し繰り返し磨かれていくのが、芸術の道であり川柳の道だと信ずるものである。

我国、川柳中興の祖と言われる井上劍花坊氏が、当時（明治三十六、七年頃）病膏盲期

にあつた柳壇に対し、

「狂句のような川柳を排撃せよ、本質的川柳に還れ！」と叫び、その著「新題柳樽」が導火線となって、澎湃として起きたのが現代川柳なのである。

種馬に雌馬少しも惚れて居す
水炊きになる三日前鶏の恋
あの船のどれにも帰る港あり
人間の道德蠅と相容れず

親の親の親その前の親もう知れず

これは私の書架にある劍花坊句集から、抜き出した作品だが、その一句、一句に流れる柳脉とでもいうものに、当時の革新川柳を感じさせる。

爾来、六十余年、有名、無名いろいろの人が「川柳は斯くあるべきだ」と主張し、論議し、「柳詩」と名付け、「俳詩」と命名し、より新しいジャンルに突入しようと、涙ぐましい努力を重ねたことは尊いことだと思ふ。

所謂「川柳斗病生活」である。

このことに関して、亡き麻生路郎先生もこう言っておられる。

——僅か八年か十年ぐらゐの川柳作家が「川柳の壁に突き当って、ニッチもサッチもゆかない」等とよく言うが、川柳の壁というものとはそんなまやかしなものではない。——中略——もっと謙虚な態度で、先人のなめて来た創作上の苦惱に続くべきではないか。

豆萩秋の「みの虫のなんば匂うても壁だった」という句をよくよく味うてみるがよい。それこそ川柳の壁は一生かかっても、突き破れないかも知れないのだ——中略——今は皆が川柳の壁へ向って匂うているのである」と。

実に至言というべきだろう。かくて我々は川柳の道に生きる限り、永久に患いつづけて行くことであろう。

信ずべし大衆智

橋 高 薫 風

梅新のあたり人魂二つ飛び

この句が昭和四十二年の大阪市民文化祭川柳大会で市長賞を獲得した。題は「大阪いろいろ」、選者は番傘の副幹事長青木三碧氏である。この句を見た時、私の友人と私は顔を見合わせた。「これはどうしたことなのか」という意味の言葉がお互いの口をついて同時に出た。結局「これが本格川柳の正体さ」。

「頬かむりの中に日本一の顔」の亡霊がまだ生きているんだ。「同じ大会で過去には良い選をした選者なのに」。大きくて古くて铸えたものの悪い面がにじみ出たのだ、悪い意味の川柳のあそびが顔を出したのだという風なことに落着いた。

川柳作家のうちで梅新（梅田新道）に一番近い場所に住んでいて、日頃梅新近辺に親しみ接している私だが、この句の感覚はまことに時代錯誤も甚だしいと云わなければならぬ。それが、近代都市大阪の市民川柳大会で

衆目の中に推薦された句なのである。

川柳社会化を叫ぶ顔の裏側に今だに底の浅い懐古趣味が果喰っているのは残念でならない。時事川柳の狂句化に批判の火の手をあげるのもいわれはあるが、川柳の認識を逆戻りさせるようなこの種の句にも厳しい自己批判を加えて欲しい。

「解らぬ句が多くなった」という声を最近屢々耳にする。平安川柳社主催の明治百年全国川柳大会の批判の一つにもとりあげられた事柄で、それには堀豊次氏が「平安」十二月号に次のように書いておられる。

「前略、過去における大会作品に対しては川柳人そのものが軽視することに習慣づけられていたのであるが、平安の大会作品に対して、これが現代の選ばれた川柳作品として何か納得出来ない一部の空気のあることを、われわれは見逃がしてはいけない。そのことに

ついでに論争の口火も切らず年の瀬を迎えたのである。問題は来る年に期待したいが、これは形式のことではなく、川柳の根源の問題に入っていくことになるが、その前に作品の内容の価値観の差位が検討されねばならないと思う。作品の統一ではなく、正しい評価を川柳界の来る年の課題にしたいと望んでいる」。

川柳塔で云う「われわれには解らぬ句」を総て一まとめにして川柳は思っているのではないかということは無論争違っている。古くから革新的な句のグループには常に激しい消長がともなっていた。にも拘らず現われては消え、現われては消えながら、漸時その数は増加しているのである。若い柳人にはありきりの五七五定型や義理人情川柳では物足りぬものがあるのである。

色が変わった

川柳塔 柳 箋

一冊 六五円
送料 三五円

川柳塔には、この漸新的な色彩さえ極めて稀薄だが、新しい芽は少しずつはぐくまれている。一方、革新派の中には、屢々意味の疎通を欠く内容と言葉で句を綴っているのが

川柳は患っていないか

多いが感心しない。句は人格である。混沌と嘘に固められた作家が輩出しては川柳に何の益もない。能のないものが能のあるごとく見せかけるかけひきなど止めて、謙虚なところを創るようにして欲しい。これは選者にも云えることで、的確に句意を解することなく、句の活殺を自在にすることは誠に得体の知れぬ行為である。

○ 他に川柳が患っていると思えることを列記すると、次のように八つ当りになってしまふ選者を安易に作り過ぎる。

まるで順番、順ぐりに××賞などの賞を受賞させるので、どの賞にも権威がない。全国の柳社が一つになって推薦出来るような賞でも出来たら納得出来るかも知れぬ。
句に誤植の多い雑誌、特に地方誌が目立つ。

食うための仕事、時間に追われ過ぎている者が、句を作り選をしている現状の上に、川柳作家程勉強をしないものもない。

○ 懐古趣味の句も、難解な句も時代が川柳界の大衆の智恵がおいおい陶汰して行くに違いない。天才には限界がある。路郎・水府の両巨星相次いで逝き、紋太病むの現柳界だが、瞬時もとどまらずに流れている。ものには限

界があつて人間の世界を味のあるものにして
いる。懐古趣味も難解も一握りのエロも、限
りないまでに大きな川柳界の大衆の良識の為

にはさして問題とするに足りぬものかも知れ
ない。大衆知ある限り川柳は患いはしないと
私個人は断言したのである。

川柳は患っていないか

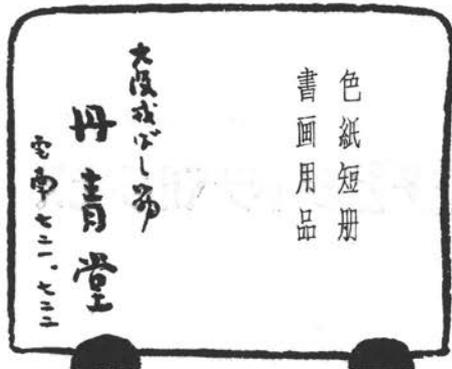
戸田古方

残っています。

民主主義が大手をふつて罷り通りだした二
十年前、伝統と民主主義の受け入れをどう取
り合せるかということよく喋り合ったもの
でした。民主主義はその後、一応順調に発達
してきたとはいえませんが、太陽族やフーテン
族まで出てきては、人造りとか道徳教育を口
にせざるを得なくなってきたのです。

川柳と民主主義とは場違いの嫌いもある
ようですが、私は民主主義といっしょに歩い
てきた体験を通して、今日の川柳を考えてみ
たいと思います。

川柳は江戸中期から今日まで続いた伝統を
もっています。幕末、狂句と区別できない程
墮落したのに喝を入れたのは明治から大正に
かけての作家達で、多くの「いのちある句」
を詠みました。柳樽にも「いのちある句」は



川柳は患っていないか

民主主義はヨーロッパだけのものではなく、「天」の名で中国にも古くからあり「愛民」は古来日本政治の理想でもありました。

自由は民主主義には欠かせない条件です。しかし、我儘気儘をやってみず、その不都合を思い知らないで、始めからルールに従う心が素直に生れてくるものではありません。本当の自由や民主主義がでてくるのはその後のことです。今の民主主義は過渡期です。

川柳は人間の「うた」であり、人間は勝手気儘な生きものです。その勝手気儘に躓かされ通しです。川柳は民主主義を育てるのに役に立つのではないかとも思われます。

路郎先生は川柳を、「人生批判」「社会批判」の詩だと定義されました。さらに、「人間陶冶の詩」と締括っていられます。私は人間を人間にする川柳と信じて、川柳しております。

古川柳の「いのちある句」も、明治・大正の「いのちある句」も、人間を人間にする詩で真実をうたい上げております。

今の川柳が患っているか、いないか、川柳のいのちが尽きるか、尽きないかという前に川柳とはどんなものかについて確りした考えをもたねばならないと思います。

川柳は遊びだ、楽しみだ、といわれるかも知れません。アマチュアのすることで、趣味

だからといって、いつ時のなぐさみでよい訳はありません。川柳の墮落は語呂合せや洒落やことばの遊戯におちて、井戸端会議を出ないような題材に安んじた時におこっております。今日そんな句は取上げられていません。だから墮落しているとも、患っているとも思いません。

しかし、発表される句がすべて「いのちある句」とはいえませんし、叱りつけて、ぎゅっと人間を締めたり、心から人生を詠歌する句ばかりとはいえません。やはり、川柳も今が過渡期なのでしょう。

もっともとおたがいに勉強し、精進しなければならぬと思っています。ことに路郎門であるわが「川柳塔」は「社会批判」「人生批判」「人間陶冶の詩」を心として、川柳社会化という路郎先生の御遺志はもとより、世の狂直、浄化に邁進したいと思っています。時代が変れば、民主主義の現われ方も違ってくるように、若い柳人達の中には新しい器に新しい心を盛ろうとしている人々もあることです。それらに関心をもつことも忘れずにいたいです。

私は自分流に先生の遺されたお言葉を具体化するため「自己批判」の句をと念願しています。批判とは客観することから始まります。距りを置いて自分を望めることです。私は「

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシ旅行サービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951
守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

私自身」の正体を知るためにいのちある限り、そういう句を作り、そういう句を育てながら、川柳とともに歩いて行こうと思っています。

★

句風の違った四氏に『川柳は患っていないか』というテーマで登場場があった。そのカルテはご覧のとおりだが、枚数に制限があった、筆者の云いたらない点も多くあったことと思う。

近

詠



麻
生
蔭
乃

昼三味線はや春となる生駒町

舞初めへすこうし下がる置炬燵

廻りみちして来た跡をふりかえる

不可解な病源ならば伏せておけ

蝶の乱舞へ高低くの墓

生駒から

— 不二田二三夫宛 —

この頃はサッパリ句が出て云うのだと思うのです。淀んだ湖水のような心では、ちっとも作句気分にはなれません。波紋をたてる石も投げ込まれず、漣をたてる微風さえも起らぬ四圍の状態にある事は或る一面から考えますと、まことに幸福だと云えるでしょう。俗に云う結構な御身分とは物質的な栄耀栄華でなく、こんな環境にある人を指します。(蔭乃)

お買物は近鉄へ
楽しいお買物ノ 便利な
お買物ノ 近鉄はあなたの
百貨店です



アベノ・上六
近鉄

アベノ 621-1231 ・ 上六 771-3331

秀句鑑賞



後藤梅志

値切つて妻を離れたとこで待ち

(好郎)

ユーモア味のある句だ。

この頃は、値切るといふことを余りしないが、値切るとは元來生活の知恵だ。商人も値切ってお客は買ってくれる。有難いのだ。値切られてツンとするのはヘタだ。但し相場を知らずに値切るのは困る。値切つてもマケないのはデパートか土産物店ぐらいだろう。

この句は、値切りぐせのある奥さんもあって、「アーマた始まったな」という連想も成り立つので面白くなる。待つてゐる方は、恰好のわるいものだ。

皆様のデパート財布すられて来

(多久志)

デパートの売上げは戦後最高だそうだが、宣伝も、サービスもぬけ目がない。商魂のたくましさには恐れ入るが、スリもこれに便乗して店内を荒らしているようだ。が、ねらわれるのは、イッもお客様の財布だ。

ウマイことばかり言わずに、デパートもスリ専門の係員でも配置してほしい。大抵は、お客様の泣寝入りになるのだ。金のありそうなお客様が災難というほかはない。

この句「皆様のデパート」という云い分に諷刺がきいてたまらない可笑しさがある。

十二月医者も退院させたがり

(春果)

十二月は、病院もいそがしい。看護婦さんもポーンナスをもらったかして、ソワソワするし、病院の中もお歳暮らしいのを持つた人があちこちする。何となく落付かぬので、恐る恐る退院を願ひ出たところ、アッサリ許してくれた。「ああこれで正月はなつかしい我が家で」と元氣づいた。

考えて見れば、医者も正月は患者を一人でも減らして置きたかろう。お互いの心が通じ合う師走のひとコマである。

高う買う屑屋を待ては続く雨

(きさ子)

パッパツなんでも物を捨てる人が多いせいか、屑屋も此頃はあまり廻つて来ない。仕方がないから積んでおくが、生憎の雨で掃除のたびに邪魔になる。

世の中がチグハグになってくると、女は女に生まれて来たことまで怨めしくなる。

この句には、そんな感情を秘められていそうだ。詩情がチホララ見える。

病むことは餓死につながる野の雀

(喜由)

作家が老齢になると、洞察がきいて、最短距離でものが見えるようになる。

病むことが餓死につながるものであることは、人間でも同じだが作者はそれを云わなない。野雀は、せつせと餌を探し求めている。人間は病めば看病する人もあるが、雀にはそれが無い。餓えそうになれば一家心中というテもあるが、雀にはそれもない。ただとび廻つて餌を探すだけだ。こうしたことが自然の理にかなない。適者生存という結果になることには誰れがきめた。野雀とどう違う。作者はじつとこんなことを考えている。

冬近く仙人めいたすすきの穂

(一栄)

すすきのことを尾花とも云う。秋の野をすいすいのびる尾花は、どこか水々しく手にからませて頬すりすることさえあるが、冬近く老いさらばえても姿は元のままで。

立つたまま枯れ朽ちてゆくさまはひとしおあわれを誘うのだが、どこかふてぶてしい姿もある。これを作者は、仙人に近いように感じた。着想としては勝れた感覚だ。

そう思つて見る冬の景色は、きつと別な感じにかわつて来るだろう。

開けにくい戸を押しりが軽う開け

(滋雀)

押しりというものは、ゴマの灰のようなモ

ノで、何処でも手を焼くが鉄筋建ちでもない限りゲキ退しにくい。格子戸の内外で、応対するぐらゐが関の山だ。

この句は、然し面白い。なにか簡単な物でも買つてやるしかあるまい。余り盗人扱いにするのも考えものだ。押売りも人の子だ。

句には、どこかあたたか味があり、あと味もわるくない。かるいうがちの句。

大役が済んで案山子も横になり

(代仕男)

擬人法でこの句ぐらゐ適確に状況を捉え得れば秀句と云えよう。

擬人句に、説明は禁物。あと味をわるくするばかりだ。この句は「大役」が頗るものを云い、四六時中、稲穂の張り番をし、役目がすみ、ひっこぬかれて苗代の傍らに放り出された状況がまことに良く分かるのである。

「横になり」が、わざとらしくない。

庭下駄へ秋風ぬける足の裏

(無 聖)

余り手入れをしてない庭だろう。裏木戸を締めに行くのか。鴟(もず)が啼いている。

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

釣銭ちゃんとする秘書あたり憚らず

清貧に耐え十二月慌てない

一万歩今更厚着の重さ知る

貯らない金諦らめの語がみじめ

この外の事柄は、作者でないから分らないが、「秋風ぬける足の裏」とは淋しい句だ。

秋は淋しいと云つても孤独ぐらゐ淋しいものはない。そこへもって来て秋だ。

この句と「電化なき貧しき炬燵なつかし」と云う句が、説明をして余りある。

庭下駄も履き古した駒下駄であろう。

天高しあくびとがめる人もなし

(静 水)

天高し。と終止符にしたのがいい。句というものは、一字のつかいかたですつかり感じ方がわかるものだ。

この句は、自然とあくびが出たような感じがする。

「天高し」？ ああいいものだ。いまこのひろい天地に居るのは俺ひとりか。というかんじだ。作者の正直な人柄がよくわかる。

末っ子のように朝顔秋に咲き

(若 芽)

朝顔は、夏のはじめから秋口まで咲き、寿命の長い花だが、この句のように秋が深くなるまで咲く。しかもその花は、昔、野に自生した権花(あさがお)に似て淋しい。人工を

とどめない自然の花に還るのだ。

この作者は、末っ子のようなという。その通り末っ娘だ。ひるがおに似た儂い花だ。いくら人工を施しても花は自然に還ることを知っている。可憐だ。

風船が破れて小さな自我終る

(美 巳代)

風船が破(わ)れてと読んでほしい。風船は、ふくらまずただふくらまずとパチンとわれてしまふ。見ていてハラハラするが、風船は当り前のことをしたままで。

おとなも、子供も、自分の呼吸で風船がふくれていくのはとても愉しい。が、その限界を知ることがむずかしい。破れる音と共に虚脱感を味わう。どうも人間にはこんなことがつき纏っているようだ。

この句の「小さな自我終る」は秀逸だ。

ねころんで芝生のうわさ聞いてみる

(笑 子)

「芝生のうわさ」とは、「何人かの芝生での噂話」の意味だが、省略がとていい。年齢もちがひ、グループもちがえば、知らぬふりをして眠つても居るかのよう盗み聞きするのはたのしいものだ。それが罪のない話でも聴くことは自由であり、どこかで其人達と交っていることになる。

そんな雰囲気がこの句には感じられてほほえましくなる。

風紋と影と砂丘に来て対話

(不 朽)

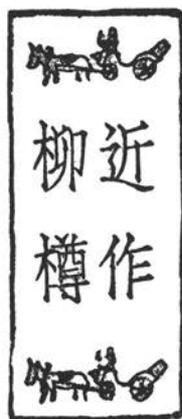
風紋の美しさにはうたれぬものはない。みな、かぜの造り成す芸術だが、その一つ一つの影がまたすばらしい。

この句は、その一つ一つの影と、風紋とが目に見えぬところで対話していると想像した

ものだが、着想にケイ拔なところがある。

砂丘そのものが神の造り給う芸術だ。とし

たらそんなこともあり得ぬことではない。



川村好郎選

干網の露の動きも冬のもの
東大阪市 坂 東 若 芽

閨病十数年

十二月に手の荒れない不仕合わせ
病室へときれときれの夜鳴きそば
もめている土地で椿の花が咲き

大阪市 江 城 功 雄

義弟癌で逝く

乳白の霧這う街を計に急ぐ
計に急ぐ新幹線に詩がない
帰る日のない旅立ちへ癌憎む
惜しまれる柩を飾る何もなし

羽曳野市 坂 野 幽 玄

行末を案ず日もあり宵化粧

可愛ゆくて堪らぬ顔で叱ってる
言論の自由身の毛の立つ話題

出し抜けに來て金借せも年の暮

大阪市 古 川 静 波

熱の児が居て元旦の昏れ速し

母の掌の温くさよ凍道のつづく
脳味噌の移植出来たらなと思ひ
夢一つみのり妻と握手する

倉敷市 川 端 柳 子

過ぎた日は戻って來ない愛の飢餓

子がねだるからとは妻のねだりよう
姑の背にかくれて嫁の座をまもり
父の忌日を迎えて

まぶたには亡父あり何時も我と住む

竹原市 森 井 菁 居

岩でんとおろおろすなと言う如し

振り上げた拳も負けを意識する
諦めた姿 冬のポブラよ

長女誕生を迎える

通訳を兼ね片言を連れ歩き

倉敷市 松下 梁水

妻の皺とほけることも胸に入り

国宝となつてなじめぬ塔となり

耐えるほかなし反省のペンを置き

愛憎をグラスについて女酔い

下関市 志賀 木石

左手を怪我の右手が歯痒いがり

父さんの靴じゃ痛いとねだられる

濡れて来た新聞なれどとがめまじ

師の手紙内ポケットにあたたかし

米子市 林 瑞枝

呼び出しの税吏に逢う日の紅を刷き

好き合うて二階住まいの姫鏡

嫁した娘が父を迎える蒸しタオル

喧噪の街で孤独が尚つのもり

鳥取市 川崎 秋女

スーパ一の広告今朝もおびやかす

小商人寿命をソット打診する

残り火をもちやす女の画き眉毛

卒業も雪解けも待つ故郷の母

姫路市 前田 美巳代

城を出て男構えをくずしたり

芸術はともかくそこに裸婦の像

愛蒸発して悪臭の憎悪

姫路城腹切丸にて

無念の辞血潮となつて飛びちりぬ

米子市 八木 千代

ふと母に甘えて妻の目を感じ

聞きなれた寝息夜なべの針進む

別れにも女香水匂わせる

私小説過去の痛みを苛め抜き

広島県 岩谷 二三枝

思考零果てなき雲に我を置き

金策の背にきりきりと枯葉舞う

慟哭の果仏心と対待する

負け犬の噴騰遠吠えの愚かさよ

大阪市 小谷 葉子

憶い出ひとつポプラの梢にかがやけり

シエカーもジングルベルのリズムなり

午前二時夢のタンゴがかきたてる

傷心をブラックにして明日を待つ

松原市 谷垣 史好

八人も育てた智恵が煙がられ

暖房へ冬の蚊年を越す気らし

よその家の灯しあわせそうに見え

豊中市 河本雪男

紅一点卑猥な歌に耐えており

ゴム長を履いて市場の紅一点

長女誕生

父となる重みをずっしり肩に受け

京都市 大久保和三郎

会者定離テールランプを闇が吸う

降らば降れわがゆく道の遠くとも

腹立てる僕を鏡がたしなめる

宇部市 楠部いさ夢

内職の妻に夜ふけの風呂を焚く

当てにせぬ苦のみくじを持ち帰り

信じないみくじも吉は悪くなし

大阪市 和田痴亭

威張らせてやって女は絞り取り

燃える余地ありそう六十の薄化粧

一筋のズボンの折目宮仕え

出雲市 森山健太郎

交通事故にて入院

不幸中の幸の傷十五針

それみろと見舞う保険の外交員

被害者の方がちよっぴり低姿勢

鳥取市 小林由多香

何か言いたそうな犬に見送られ

本社とはビルの一部屋借りただけ

厄だった忘年会を派手に飲み

八尾市 高杉鬼遊

どぶ川へネオンは夜の化粧する

傷ついた心も抱いてくれる霧

枯葉にもせめて乱舞する名残り

青森県 岩淵一星

神経をきざんで部下に無事な日日

貸付に社長は姿勢よく坐り

生活を背負う交際まで妬かれ

伊丹市 貴志千尋

旅先で世間はせまい顔に会い

善後策よりも責任回避策

不可能を可能に社長だから通り

島根県 堀江芳子

よそごとでないぞうちの娘もう二十

初恋のひと戦盲を知るまいに

鍋つつくまでが冷たい台所

尼崎市中谷利美

吐息つくだけで楽しい着物ショー

トップ記事だけで二流紙勝負する

タクシーを探す男の女傘

尼崎市 中 溪 慶 彦

口振りがもう親バカとなって居り
まだ脈があるとは男の得手勝手

妥協することに引け目を感じられ

北九州市 藤 田 独 楽

大都会橋は道路にかかるもの

長期予報聞いて予定がたてられず

世話人のお顔を立てて出来た寄附

竹原市 三 宅 不 朽

失ないしものかえるごと潮満つる

雪しんしん喪服喪服として冴ゆる

ひかえめにきよばりきよばりと福寿草

八尾市 高 杉 千 歩

よしあしも明日につづく除夜の鐘

ライバルを意識殊更睦まじく

労わりあう祖母すこやかに春の酒

出雲市 王 紫

信じ疑い信じ疑いうたがいつつ信じ

蟻の集団文化財とは知らず

十二月忘恩の徒となり果てる

大田市 藤 田 軒 太 楼

方言が飛び出て見合の角がとれ

生甲斐の幸を味う暮のそば

内職の妻が咳する暮の冷え

大阪市 奥 川 継 之 助

いつからか激しきものを失いぬ

まっすぐに生きよう子等へ屠蘇をつぎ

元旦の心を神に近づける

島根県 小 砂 白 汀

謙譲を無力と隅へ押しやられ

胸割って聴けばそれぞれごもとも

端正の松を啖って散るもみじ

島根県 山 本 文 子

連休を寮で過した日の不満

山脈の皴へ人家がすがりつき

行動の中を賀状の数でよむ

熊本市 北 川 一 進

暗号もちよびり混ぜて娘の日記

友達が出来た夜学の灯も楽し

チャンネルは一番小さい子がにぎり

京都府 福 村 飛 龍

二三本どうでもよさそなへアーピン

嫁いだ娘便りがないがそれでよし

手洗いの水が凍った手のやりば

高知県 山 川 勝 子

守口市 池田 豊平次

母一人子一人ババ抜きとても無理
サラリーが多い女でも釣り合わず

文化住宅と言う窓に陽はそっぽ
掴み取り慾の分だけこぼれ落ち

ボーナスをよこせと銀行さんも待ち

広島県 高 橋 鬼 焼

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

行くあてもきめず女に歩を合せ

無細工な俺だが牛がなめてくれ

赤旗に用なし鍬を振る

凡くらに忘れることのむつかしさ

姫路市 大久保 大夢子

一金三千円也のおじきする

枯芒風しよう条として犬走る

鳥取市 有 田 と し 江

夕闇は迫り自炊のぬくめ汁

秋晴れへ病夫のふとん干す日和

八幡浜市 別 宮 す き

肩叩く子でいて欲しいいつまでも

鳥取県 谷 無 閑

お母さんの年齢をこえます除夜の鐘
科学への挑戦ベトコン穴を掘る

不仲でも隣の梅は匂おって来

大阪市 藤 田 頂 留 子

ライバルの花環に又もしてやられ

仙台市 川 村 映 輝

有難やまわらぬ首へも初日差し
小羊に見えたか改宗すすめられ

内閣改造拍手を送る者もなし

鳥根県 堀 江 正 朗

転校のその日喧嘩に勝つてくる

大阪市 大 谷 重 夫

おだてだと知って嬉しさこみあげる
夢醒めて見えぬ口惜しさこみ上げる

留守番に居眠りするなどベルが鳴り

貝塚市 行 天 千 代

家計簿を時々覗ぞいて愚痴られる

倉敷市 小 幡 里 風

うれしい日無口な夫が座を涌かし

(小豆島観光)

主張する君の歩調が高すぎる

一泊へ大きなバッグで肩こらし

海の音男だまって聞いている

七尾市 松 高 秀 峰

まかぬ種生えぬと知ってる勧誘員
セールスになってお酒の味も知り

竹原市 生 信 笑 子

哀しいと言わず女は後ろ向き
初恋はうすみず色のバラのよう

竹原市 脇 本 政 己

自動車も買うて百姓してもらい
思い出の人を脚色して語り

愛媛県 崎 本 満 子

女さえ溜息の出るいい女
憎めない人が又も憎い口

下関市 志 賀 汀 花

又一人店員がふえうれしい日
妻に母に売り子にもなり年暮るる

守口市 田 中 笑 風

うち股とそと股歩調が合う母娘
ささやかな夜景わが家の灯の明さ

河内長野市 井 上 喜 醉

真心に触れて催促せず帰り
スピーチにつまりひやひやしてる妻

堺市 羽 田 一 扇

情熱の失せた仕事に養われ
セールスのテープのような話し聞く

小松市 四方天 弘実
人生の回り舞台で操つられ
窓叩く霰に遠き日の想い

竹原市 岩 本文 晴
ともかくも握手したいんだ今日の僕
負け犬の後姿へ冬の影

羽咋市 三 宅 ろ 亭
活きている話題をもって子の帰省
ふくらげをよく食べさせて子を帰えし

石川県 同 村 虹 要
団体旅行中にお一人へそ曲り
司会者の感が狂ったインタビュー

竹原市 時 広 一 路
寒菊の白に空しい今日を悔い
言い過ぎた心をよぎる隙間風

大阪市 河原林 比呂路
退屈を足にまかして試歩に出る
退 院

羽曳山名残り虫の音きき入る夜
松江市 内 藤 喜 夫
定年のないまま稼ぐ小商い
薄幸をはっきりみせた顔の皺

大阪市 塩 浜 一 路

ボーナスはネクタイ二本買っただけ

若き日の寮歌を歌う年令になり

大阪市 西 田 溥 子

原稿用紙よ靴がもう破れてる

満月の不満は今宵雨となり

大洲市 堀 内 暁 風

横車通らぬままにすねられる

けちけちと貯めて一生狭く生き

広島県 南 条 露 声

助けあいなどと十円出した切り

挨拶は歳暮が効いた顔となり

鳥取市 藤 本 佳 女

就職の嬉しさ夢にまでつづき

叱る気で呼んだが先にあやまられ

鳥取市 谷 尾 虚 風

臉を閉じて過去懐かしむ気の焦り

催促も四度目は少々腹を立て

鳥取市 藤 本 和 宏

俸せで居れよ転校さようなら

もう母の歯ブラシ先に濡れている

鳥取市 藤 本 恵 子

叱られぬ先にあやまる成績表

父ちゃんの今日の疲れを靴に見た

岡山県 目 賀 芳 月

ああ多忙人間性を見失い

初春の陽を背にゆっくりと爪を切り

岡山市 押 目 白 扇

冬の窓影法師すら動かない

レンタンの穴が気焔を上げて冬

仙台市 平 野 光 道

マンションに住んで大晦日の夜も稼ぎ

サンダルに似た靴女教師の出勤

大阪市 半 田 夏 生

マステゲームオモチャのマーチはよくそろい

胸部再手術

気がつけばまだ生きている痛さなり

大阪市 岩 城 太 朗

出世コース撰ばざりしを悔とせず

ほっといってくれとほっとかれぬ話

岡山県 荻 野 鮫 虎 狼

引越しへ茶柱の立つお茶を飲み

春日和姑の年忘れさせ

島根県 大 森 孝 華

離れまい台風よけて残り柿

冬の音肌へ感じて縫い急ぐ

宿毛市 瀬田 美知

若者の特権のように田舎すて

終着の夢は有料老人ホーム

呉市 横田 英詩

一人旅ネオンを避けて湯に浸る

儲けとは辛し寒波のかき筏

加賀市 木村 美穂

あだ名にも馴れて女の小商い

慰安会夫に見せぬ顔で酔い

大阪市 黒田 真砂

偽った心に薔薇の花がゆれ

倅せな母だと思ふ子の寝顔

善通寺市 伊藤 歌子

クリスマスイブ子供の夢はケーキだけ

手ばなしでよろこべぬ小笠原

高槻市 山田 スミ子

切傷がいたみ出す夜の冷え

一年の足あとのんびり振り返り

泉佐野市 大工 チヨ

煽られてると知りつつ又唄い

古木でも年に一度の春を待ち

草津市 久保 和友

指切りへ信じあう眼の美しい

左遷されてからは余興の芸が落ち

竜野市 森下 峰子

美の秋へ絵心知らぬままに付ち

諫早市 原田 明春

年の暮わが足音にまで追われ

大阪市 梅園 摩耶

怒らんでよかった弟とのわかれ

高知県 岡本 香芳

蚊の脚の折れても口は血を求め

笠岡市 高木 波柿

いささかの恩給に生き民生委員

鳥取市 近藤 秋星

年の暮小さな善意預けて来

竹原市 出島 静波

空缶を蹴って孤独の音を聞き

堺市 斎藤 亜也

デパートに振りまわされている景気

竹原市 簗田 浄美

好き同士見ている方が気にかかり

河内長野市 小川 耕人

大げさな言訳をする電話口

大阪市 西本 保夫

世間知る勉強になった村八分

新潟県 高野 不二

豊作をねらうチラシが今日も来る

名古屋市 花東 千久良
生酔いのひとりストーブへ置去られ

泉佐野市 大工 静子
永年の不仲孫が取持つ仲直り

大阪市 堀口 欣一
五円玉ぼつぼつ要らぬようになり

河内長野市 森本 黒天子
栄職の昔に見入る写真が出

大阪市 影山 啓吉
催促の使いの者にチト飲まし

新居浜市 村上 水軍
伝統をかすらに託す日本髪

京都府 菊沢 破天
つめられた頃が懐しい白髪ふえ

尼崎市 平井 露芳
行方不明もう蒸発をしたと決め

鳥取市 山本 珂也女
体験が買物上手な母にさせ

鳥取市 小谷 章代
何事も体験と母繰り返し

鳥取市 河口 忠志
松葉蟹解禁高価見て通り

鳥取市 藤本 征山
先生のように看護婦口を利く

鳥取市 藤本 鎮也
母ちゃんに礼言う親父素晴らしい

鳥取市 和田 帛山
低い鼻気になる式がもう真近

トヨタ自動車指定工場

自動車販売・修理・板金・塗装

三和自動車工業(株)

代表取締役 八木 摩天 郎

堺市大仙中町5

電 堺 (41) 2 6 8 5

痴盲録

高鷲亜鈍

死眼でも湯槽におれば悔はなし
午の鼻の輪からエリート意識する
乱れ雲のごとく言葉は見えかくれ
酒だけでどうにもならぬ泣き黒子
刑務所の露とはならぬ黒い霧
ぬけぬけと雛壇にたつ黒い霧
口笛を忘れて犬と杖の道
怒鳴りたくなるほど娘字がよめず
鏡台にうるさがるれたこの手紙
気がいらぬのがだまってあがる梯子段
怒り屋の守る電気炬燵によりつかず
食わしてもうるさいことはかりいう
めくらでいのちが惜しい酒ほしい
手術して首ときまってるからも酒

近詠

大阪市 橋本 緑雨

椿 温 泉

湯の宿のタオルぬれたのを嗅いでいる
宿帖を笑って書いた女連れ
冬に来た旅夏が良いとてかるいもめ

小松市 山上 千太郎

年末のどさくさ不用のものを買い
一枚のはがきに心臓さわぎ出し
但し書の方に儲けの中見つけ

くらやみへ酔いぶち撒いて杖おどる
焦熱の中で尼僧のオルガズム
犬猿鷹鶴右左
生きている便所におとすタバコの花
ぼくだけに黒い雪がふってくる
年の総決算もまっくるけ
交替におてて曳かれて日参す
首巻で小犬を抱いて風に入る

大洲市 米沢 暁明

いてう散るよくぞ日照りにたえた色
ポーナスが無いから妙な気が起きず
富士晴れてみんな起した宿の朝
すねられて飯でも焚かうかと思ひ

和歌山市 秋月 宏方

漫才を夫婦で笑い平和な日
永平寺にて

修業僧足袋はなかつたわけでなし

東尋坊にて

神さまの岩のデッサン見て帰り

見えぬとも物みな大地にささえられ
寄って集って生かしてくれるわが吐息
ああ思いこつて日を送るわが吐息
大事せよ返事はいらぬという便り
目と白髪だけ十年老けてみえ
マグダラのマリヤを恋しとおもう
勲章をやくざ渡世に下される
菊薫る文化の日でも鼻毛抜く
冬きたる氷の刃ひっさげて
鬼も福も声かけないで素通りす
枕叩けど妄想たちきれず
空拳とわかかっていても両こぶし
石と化すわが身を活かし給え神よ
見えるから見たまでと不遜な目
差出人も受取人もない子おり
名札を胸にあなたまかせの旅に出る
貨車積でよろし旅の音をきく
天の慈悲土の母愛に活かされる
他人の身もわが身もみな人扶けあい
銀色と知らずに月は雲の旅
せつかにじゃれてくる小犬の足をふむ

豊臣秀吉

(三)

富士野 鞍馬

れですぐ馬を乗り捨て、広徳寺に逃げ込み、浴室で急ぎ頭を剃って法衣を着て庫裡に紛れ込み、味噌摺り坊主になりすまし、四方天を欺き危難を免れたといわれ、この話は講談にもなっている。

猿の影武者髪を剃り味噌をすり

四王天後ろには猿前に虎

(一一三三)
(一五七四)

と川柳に詠まれ、虎は加藤清正で、この時四方天は清正に討たれたのである。

光秀亡ぶ

天正十年(一五八二)六月十二日、秀吉は四万余の兵を率いて淀に着き、甲い合戦という意義を明らかにして、翌十三日、洛南山崎で、明智光秀の軍一万六千と会戦した。

御神輿を天王山へ堀尾すえ

(一〇三三)

わいわいは天王山の明智勢

(一一三〇)

この戦いの勝敗は、天王山を取るかどうかできまるといわれていて、それを、秀吉軍の堀尾吉晴が占拠した。

この時、大和の筒井順慶は、一万の兵を率いて、光秀軍の後援のため洞ヶ峠へ出陣したが、日和見をして動かず、秀吉方有利と見て、秀吉軍についたため、光秀軍は総くずれとなった。川柳にまた

順慶坊主巾に日和を見

(一〇六三)

五月雨の日和見紹巴と順慶

(九一五)

日和見て順慶町の夜見世出し

(一〇五三)

高松城水攻め

高松へ水引き猿の大仕掛

(一〇四六)

敵を窪く見高松を水で責

(一三六三)

水責は手をぬらさず勝利也

(五五二)

天正十年(一五八二)四月、秀吉は六万の

(九二二八)

兵を率いて備中におもむき、五月に高松城を水攻めにした。この時加藤清正は先頭であった。そして六月に入った。

この間に明智光秀は、この秀吉軍を援助する命をうけたが、その軍を整えて、京都本能寺に駐在していた信長を攻めたのである。

ところが、高松の城將清水宗治は、全城兵に代って自刃し、もすこしで落城という六月三日に、主人信長が本能寺で光秀にやられたという急報をうけた。

秀吉は、この信長急死を敵方へも発表し、前の矢矧橋上の人相見たった安国寺惠瓊を介

して、敵毛利・小早川と和議を結び、却って援兵をうけて、五日には早くも兵をまとめて急ぎ京都へ引返した。

そこがさる者毛利家と先づ和睦

(一五七)

秀吉髪を剃る

天正十年六月八日に、秀吉は姫路の居城に帰えり、すぐに風呂に入り、湯殿から「明日出陣」を発令し、城内の全財産を全部部下に分配して、

「我れはいづれにしてももはやこの城には帰らぬ。主君のため討死すればもよりのこと、勝利を得たら、思うままに何処の国にも我れは城を構えることが出来るだろう」といった。そして単騎で先駆したのである。

明智方は、秀吉の上洛を、尼ヶ崎辺に待ち伏せ、ただ一と討ちにしようとして、四方天但馬守が土民に扮して構えていた。秀吉は、そこへ一騎で駆けて来たが四方天に遮られた。そ

と作られ、今に日和見のことを「洞ヶ峠」という洒落言葉になっている。また洞ヶ峠のことを日和見山というようになった。

敗れた光秀は、坂本さして落ちゆく途中、小栗栖で野武士（土民ともいう）に刺されて落馬して果てた。

引返し幕で光秀してやられ
引かへしの幕で明智はしてやられ (拾五七)
川柳は土民に竹槍で刺されたという説に従い、

光秀を素人細工に殺すなり (八二九)
槍の出た藪は小栗栖ばかり也 (拾四七)
等、この外多く詠まれている。

雑任（これとう）將軍として、俗にいう光秀の三日天下は、六月二日の本能寺攻めから十二日目に亡びたのである。またこの弔い合戦を

御墓所へ猿は桔梗を供へたり (八五七)
亡君へ桔梗を折って手向草 (八九七)
と詠まれ、桔梗は光秀の紋である。

大徳寺

山崎の甲合戦も全勝で完結したので、天正十年（一五八二）十月十五日、秀吉が裏主のような形式で、信長の本葬式を、京都紫野大徳寺で執行した。

ここで焼香順が大モメとなった。老臣柴田勝家は、信長の弟神戸信孝を第一番と主張し、星崎長門はまた、北畠信雄を推し、滝川一益の調停で兄弟同時に焼香ということになった。ところへ秀吉が、嫡孫三法師を抱いて出て、この焼香第一番は三法師なりと大喝して焼香した。これには鬼といわれた柴田勝家はじめ、誰も何ともいえなかつたのである。

近 詠

今治市 長野 文庫

明治百年伏見桃山観光地
来年は百年でない明治
太陽は明治百年など知らず
明治百年文盲が無く小うるさい

今治市 月原 宵明
失対が師走の街を掘りかえし
にわたりの足東にして十二月
河一つ距てて墓地とモートルと

名古屋市 長谷川 鮮 山
ねばり甲斐あとで笑って領収書
金持って来いとは云わぬ招待状
拝みたい気持ち頭をそっとさげ

これは、芝居にも講談にもなっていて、素晴らしい場面で、
焼香場日送りする講釈師
と川柳もよんでいる。この大徳寺焼香は、多くの川柳に詠まれ、

一も二もなく焼香は三法師 (六二二七七八九)
立者の子を出使いの焼香場 (一三三三二〇)
束帯で出た暫くは焼香場 (四二二ノ八六六二)
焼香の座中しられけし猿の声 (八六六二)
犬よりも猿がりきんだ焼香場 (六九六)
お猿が守りて泣やんだ焼香場 (一五二二)
柴を柴火を摺合った紫野 (九八八七)
追善に生胆をとる大徳寺 (七八二八)
焼香の威は奪はれぬ紫野 (七九三九)
焼香に無念涙の鬼柴田 (七七七二)
焼香にひねった論は世に薫り (一五七五)
焼香をひねる軍慮の紫野 (六一一六)
五月雨日本晴は焼香場 (六九三九)
焼香に柴が芽を出す紫野 (六二二〇)
太閤のきざしは見える焼香場 (六二二〇)

★吉が大きくなるきざしであった。

▼関西川柳作家懇話会誕生、京阪神の柳社の有志が集って十二月十日尼崎の白頭山で發起人会を開き、和やかな会の運営を期すこととなった。川柳塔社から白柳・す・む・薫風諸氏が名を連ねている。事務所は尼崎市西御園町一五海士天樹方・電話四四一—四三三三

全出席十五年を

かえりみて

傍 島 静 馬

の一句が西尾葉氏によって抜かれた。僅か一句ずつだが三カ月連続して、諸先輩古豪に伍して入選したことは甚だ得意だった、そして浅はかにも川柳組し易しの感を抱かせ作句意欲を大いに燃え上らせた。

しかし良いことは続かないものだ。六月は奮斗の甲斐なく全没。つづいて七、八、九、十月と連続して全没の憂目に会い、初めの意気込みほど知れやう、改めて川柳の難かしさを痛いほど知らされた。こんな状態で十一月の句会はどうしようかと大いに迷ったが、若しやと思ひ兎に角出席したが、まともや見事に全没を喫した。これで連続六カ月全没だ。

このときのショックは非常に大きく、もう川柳はやめようと思ひつめた。だが、こゝでやめては皆んなの物笑いだし、折角やりかけたこの道をそのまま捨ててしまうのも惜しい気がして、いろいろ思ひ悩やんだ結果、兎に角成績は二の次とし、作句の勉強のつもりで欠かさず毎月の句会へ出てみようという気持ちになった。

そして心機一転勇躍十二月の句会に臨んだところ幸いにも二句が抜けた。一月には一句二月にも一句が入選した。こうなるといよいよ興味が湧いてあのときやめなくて良かったと思ふようになった、以後回を重ねる毎に幾多の消長はあったが、知らず知らずのうちに十七年九月には故路郎先生から本社会会の選者としてご推薦を頂き、漸やく柳人の端に加わることが出来た。思えばわれながらよく続

けたものだ、僅かに月一回の句会ではあるがお天気の良い日ばかりではない、二月の吹雪六月の豪雨、或はまた九月のあらしの日などにぶつかり、よほど欠席しようかと思つたことが何度かあった。また会場が道頓堀の文楽別館、その近くの観光ホテル時代のときこんなこともあった、句会の当日来客と夕食とともにしなければならぬ場合、態と会場附近の料亭に席を設けう、食事半ばに三、四十分間中座して急いで会場に駆けつけ、出席の記名と兼題の出句をして、まともの宴席へ取って返したことが二、三度あるが、こんな芸当は常人には想像もつかないだろうと思う。これみな、川柳が好きならばこそ、そして折角長らく保持してきた無欠席の記録を失いたくない頑なな意地がさせたことだと思つている。斯くして本年二月を以って、十五年間百八十回無欠席の記録を樹立し得たのだが会場にほど遠い神戸地区からそして現在の高槻市から、われながらよくも根気よく通いつづけたものだと思つている。

これは私の川柳に寄せる情熱にもよるが、割合い時間的に余猶のあったこと、健康に恵まれていたこと、妻や家族のみんなに理解があったこと、またそれによりまして、故路郎先生をはじめ、諸先輩柳友諸兄の温かいご指導ご鞭撻を得たことなど、総て好条件に恵まれていたればこそ成し得たことで、此の点大へん有難いことだと思つている。

私はいま、十五年間無欠席の記録を達成した喜びに浸っております、だが今後更に五年

私の川柳入門は昭和二十八年二月七日にはじまる。当夜先輩里田一十氏の熱心な勧めに誘われて、下寺町光明寺の川柳雑誌本社句会場へ行ったが、その日は何んの準備もせずもちろん出句もしなかったが、終始和かに愉しそうな会場の雰囲気は大へん興味を抱いた。これがそもそも川柳の道にはいる動機となったのであるが、翌三月の句会で試みに幾句か出してみたところ、席題「男さかり」で

「何くそと思えど男さかり過ぎ」

の一句が計らずも中島生々庵氏の選にはいった、何しろ一カ月ほど前に川柳をやる気になったばかり、しかも初めての出句だ、たとえ一句でも入選したことは内心甚だ得意だったし、また大へん嬉しかった。

「次いで四月の句会では兼題「かけ出し」

「かけ出しは何んでも記事にしたくなり」の句が故路郎先生の選にはいった。更に五月には、兼題「身勝手」

「身勝手を云う客店の良いお客」

或は十年無欠席のレコードを作りたいと思つております。そして今日只今からこの目標に向つて精進を続けていく覚悟でおりますが、どうか皆さん変らざる温いご指導とご支援を切にお願ひする次第です。

理事長抱腹絶倒記

本田 惠 二 朗

昨年十一月十一日柳友しのぐ君の愛車に同乗して宇野線茶屋町駅へ生々庵、小石ご夫妻をお迎えにひた走る。秋空高く晴れ渡つて正しく歓迎日和である。プラットホームで待つことしばし、急行鷺羽四号は定刻に到着、こやかにご夫妻は降り立たれる。岡山駅で服部十九平氏も同乗して来られる。しのぐ君のハンドルは一路倉敷大原美術館へと向ひ、世紀の名画を觀賞して頂き国立公園鷺羽山へと急ぐ。

鷺羽山の景観にはご夫妻ともに大満足をして頂いてお招きしたかひがあったと内心うれしくなつたものだ。海の夕景を窓外に眺めつつ恵二朗居に到着して頂き、入浴どてら着と型通りに進行して、いよいよ酒杯ということになる。ここからが本番であり、圧巻である。胸襟を開けつ放しての談論風発である。

別にテーマがあるわけではないが話題は泉の如く湧き出してと言ふよりも水道管が破裂したようにと言つた方が適切な表現かも知れない。音に聞えた恵二朗の饒舌に十九平の諧謔が油をそそぐので舌のブレイキがこれとしてまったようである。その覚悟はちゃんとして来たとおつしやる生々庵先生も聞きしに優るものと思われたにちがいない。これは内緒だが、ご夫妻と十九平の三人は揃つて総入歯であるが愚妻愚娘製作の内海の小魚料理をなんとまあよく食べて下さつたことか、見ていて痛快であり、愚妻の喜ぶことしきりである。

私は三十数年來の結婚簡素化論者であるが酒の簡素化はやらないと威張つてみたり、十九平の魚の上手な食いっぷりを猫泣かせであるときめつてみたり。爆笑また爆笑の渦である。猫泣かせとはあまりにも上手に魚をしゃぶつてしまつて猫君のしゃぶる余地はなくなつて猫君をして嘆き泣かせたという意である。

自己評価わが人生は六十点

これは私のいつわらぬ氣もちの一句だが、生々庵先生一と声あり、それは甘過ぎるよ。私はつまずき褒められたものだが、しばし考えてみると顔になつたものだが、しぼしぼと悦に入つたことは悦に入つてはならない場面と氣づいたが、もう手おくれである。ピーチクパーチクの漫才よろしき図と相成つて一座揃つての抱腹絶倒である。生々庵先生もこんなに笑つたのは何年振りだろうかと洩らされたが、膝を両手で叩いての爆笑振りに胃けいれんでも起

されたら小児科に來てもらわねばならぬぞと思つたりしたものだ。書けば切りがないが、抱腹絶倒のシーンが幾回あつたか計算出来ぬほどであつた。翌朝横つ腹の皮になんだか奇妙な感覚をおぼえたぐらいいかない。翌十二日筋運動過剰となつたにちがいない。翌十二日は私の主宰する鷺羽川柳会の十周年記念大会であるが、おかげ様で盛会でうれしく感謝している。生々庵、小石ご夫妻のご來駕こそ盛会の原動力となつたものとご夫妻に心から感謝申上げて駄弁のペンをおこつ。

盲目抄と名花

二輪

福 井 野 迷 路

盲目抄ならびに冬青氏の「亜鈍を味う」を拝見し、美房氏の「名花二輪絶讃」好郎氏の「女流作家花盛り」等、諸家の隨筆を読んで感あり、ここに短歌二首。

半時も目つむつとれぬ罰当りへ
心の川柳 亜鈍尊し

老いの目のどこまで辿るすくすくと
あまざし向う名花二輪の

右の二首のそれぞれ中の七七を抜いたら嘆声二句となりました。

初歩教室

題 — 「一握り」

菊沢小松園

題詠にも色々あるがまあ本月などはやはり
難しい方であろう。路郎先生の名吟

一握りああ人生は和にしかず

スケールの大きいこの句は私の好きな句の一つである、残念ながらこの月の沢山の句も太陽の前の真昼の星の輝きもない。もともと御互いに勉強して立派な句を創るよう努力したいとおもう。

一握りほどの調査で視聽率

二十貫の兄も一握りの壺にいら

一握りまではよかった手が抜けず

一握りの善意が杵の音になり

一握りの塩が神様の座をつくり

一握りの報謝に鈴の音残し去り

①調査の矛盾を批判した句、社会への眼が

鋭く磨かれている。②淋しい句にも川柳の眼

はユーモアを忘れない、そこにこの句の持つ

明るさに救われる感じ。③大欲は無欲に似て

欲張り過ぎた矛盾が面白く現われている。矛

盾のない人生では息が詰まろう。④善意の人

が寄って餅搗きになったのである、これも年

末助け合いの一環であろう。⑤人間の単純さ

は一握りの塩によって淨められたように思い

見えも有りもしない、神々を招じ入れる。こ

の句は、それ等の人々の良さに冷笑を浴せ

る。⑥正しい捕え方がこの場合、あまりにも

平凡常識に過ぎては面白味に欠けるようだ。

来年を期して甲子園の土一握り

一握りずつ米も増えゆく子の育ち

負けたのが砂を握って立ち上り

戦争も平和も一握りの人にあやつられ

真相はほんの一握りの人が知り

①期待外れの今年、来年に希望を継いだチ

ームの団結が嬉しい、句境の明るいのが取

柄。②子供の成長を米の消費から見ているの

が面白い。日常の身辺に向けた眼の厳しさを

買う。③負けてもただは起きない土性骨を見

せたことがよい。④少人数によって引き廻さ

れる世の中、常に過去の歴史はそうした人達

によって書き改められて来た。⑤これも同じ

ことが言える、裏の裏のまた裏の人通り。

一握りの砂でままごと都会の子

一握りの砂ハサポテンまだ眠り

一握りたのむと再起の汽車の窓

お互いの乏しき中の一握り

お互いの乏しき中の一握り

一握りの沖繩はまだ帰されず

一握りの土を手向けて島を発つ

①これも目新しくはない、ただコンクリー

ト文明の悲哀を詠ったものに過ぎない。②こ

れは面白い殊にサポテンに眠りがあるとは凡

手ではない。③失意の身の再起出発の光景、

蹶起を願うぐるりの温情も窺える。④この一

握りに人間の真実味を見る句想の広さが参考

になる。⑤この一握りは大きい。題材の消化

も色々あることに気附く。⑥戦後の遺骨収

集団の故国の土を想い出の島に手向けて、そ

こにはまだ戦争の傷痕が穴をあけている。

暖簾あり山葵きかせた一握り

栄光の甲子園の土一握り

握手にも大物らしい手の温み

一握り年ほど握れぬ銭掴み

①のれんに独得の味みて誇るしにせ、本わ

さびの利いた句も嬉しい。②同じ一握りの土

でもこれは勝って帰る土である。華やか。③

大人物の温味を心で受け止めたのである。④

これは同じすしの句でも中七に重点をおいて

面白い。⑤世相がよく見詰めている眼が川柳

をつくる。さほどがよく利いて面白い雰囲気

が窺えるのもよい。

一握り秤に馴れぬアルバイト

うまかった喉を過ぎゆく一握り

玉碎の一握りの土故国へ迎えられ

一握りの情集めて慈善米

一握りの粗さえ拾って二十年

①目分量でも判る目方もアルバイトの哀れ

秋代

千代

芳子

さは秤にも暇が入る不馴れさが想像されて面白い。②うまいのも少ない量では一瞬のことそれが本当の味というものか。③遺骨もない玉砕した島の一握りの土が遺骨の代りに今故国へ帰ってくる、戦争の傷痕を今更に抉られるおもしろい。④社会の善意に頼っての一握りの供米抛出運動、だが今では恐らく慈普米とはいえない。⑤落穂拾いも長年に渉ると相当の量になるう陰徳陽報の明るい句になった。

- 一握りの土とは知らず新芽吹く 紫
- 一握りの餌を忘れぬ群れ雀 紫
- 一握り掴んだ運を育てあげ 正朗
- 大臣がひねり潰した一握り 正朗
- 一握りの心臓世紀の話題ひっそりえ

句会出席

一年間253回達成

山田 季 賛

昨年一月三日の「ふあうすと」の新春句会をスタートに、十二月二十六日の「天守閣」句会までの一年間に二五三句会へ七句会の全出席も成った。広島、京都、兵庫と句会を走りまわったものである。ときには一日に三会場へ顔を出したこともあった。ただ出席するだけでは意味がないので出句するのだが、一日に三会場も回ると二十題近く作句することになる。

東海道新幹線工事の経験を生かして、次の大事業である山陽新幹線工事でも本格的となり、今年では多忙極まることになりそう

静観堂

①人間から見れば僅か一握りの土塊でも、槌り附いている種子からは後生大事と頼りにされて新しい新芽も吹く楽しい天地となる。よくも行き届いた句に句にたおもう。②これは着想の平凡さが浅い句に終った。③人の気附かぬ小さな運を適さず温めて育て上げた努力のあとが句を通して窺える。④時事吟、心臓移植をこの題から咏まれたことに感心する。

- 一握り一人暮らしの米の味 遊仙
- やっと安心一握りの灰になってから 遊仙
- 一握り泣きやまぬ子を持ってあまし 破天
- 御題川に見せる一握りの砂 初甫

で、仕事に熱中しなければならず、川柳だけに打ちこむことはできない。しかし北川春巢先生にご指導をうけた川柳は大切にしたいと思っている。ふ社の海士天樹氏の二三五回へ挑戦する気になったのが原因だがふりかえてみて二五三回もよく出席できたものとわれながら感心した。だがこの裏には家庭の理解と仕事場の人たちの理解があったからで、自分一人の力ではこの記録は生まれなかったであろう。それとも一つ、何よりも健康であったことである。出席回数が作家の本分でないことはわかってはいるが、とにかく自分を試してみたかったのである。253この数字は自分の生涯の記録である。

「季賛ガン張れよ」と力づけてくださった諸先輩にも感謝している。さあ、こことは仕事仕事で押し通すつもりである。

一握りの砂も護身の一つにて 初甫
 倒んでもただは起きない一握り 誓二

①独身生活の一コマ、小量では飯の味も悪るからうがたがそれだけの句で済ませよう。②仏になったことがぐるりを安心させるようでは浮ばれない。広い世間にはこんな人間も案外多いのかも知れない。③この一握りは問題、私の思っている一握りの他かも知れないが意味は判る語調のよさで救われている。④武玉川ばりの短詩型、御題を咏んだ句は他には無かった。すうりとよく纏っているのは取柄。⑤忍者はやりの昨今護身には手軽な法、昔は女性の夜の一人歩きなどに応用されていた目つぶしの法。⑥よく調子はよいが感じ方は浅い

- 一握りあいいそはおまけの一握り 徹也
- 一握りの持ちより善意の灯をともし 千梢
- 一握りさえさえずして嫁に行き 真砂
- 一握りの善意に再起助けられ 真砂
- 一握りほど豆をとる齢になり 亜也

①咏み古された境地で損だ、判り易くて絵にすれば面白い川柳。②善意の灯で生きたがよく似た同趣の句は多い。③女の手を握るの一握りとはあまりに不面目、句意に矛盾を感じし覗い処も浅い。④失敗して四辺の力添えて再起をはかる温情の句だがやや平板。

- ⑥あまりにも言い古された場面で魅力がない
- 一握り民族いまだ衰えず 小松園

三月二十日締切 五月号発表
 題「階段」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号
 菊 沢 小 松 園

雪

森本法泉子選

大阪の雪でつくった雪うさぎ
 晴れ姿蛇の目がほしい雪の道
 南天の紅さポッカリ雪に浮き
 雪景色お地藏さんを見失い
 地にかるうれしさを舞うばたん雪
 雪の道あけねばあけぬようにつき
 公害がここまでのでびた黒い雪
 日本画のように暮れゆく雪の村
 雪だるまこも子どもがいるとま
 紫の御高祖頭巾が雪に映え
 残り雪あつめて看護の水枕
 訪れる人もとだえて八瀬の雪
 豊年のとり入れ終った雪をほめ
 しんしんと声なく海に雪消える
 雪つけて地下足袋戻る釜ヶ崎
 雪道をあけて夫を送り出し
 ひとつまみ松葉に雪がのっている
 西郷さんの緋を濡らす牡丹雪
 初あられカラトタンが奏々エレキ
 電線に童話がうまれる銀モール
 愛憎も消え新雪の道を行く
 銀嶺を飛びかう赤黄青緑
 豪雪の故郷に送金少し増し

保夫 白扇 無聖 千翁 惠二朗 鶴丸 和宏 不二 十九平 代仕男 卜占 珂也女 痴亭 痴亭 とし江 古方 古方 白汀 白汀 紫 千代

雪の来る予報に稲をとり急ぐ
 老朽校舎の子等へ雪解けの雫音
 ほどほどに降って初雪ほめられる
 雪になり飲みたい顔がうなずいた
 雪予報明日の出張へ舌を打ち
 ラッカーの塗装にたり吹雪する
 此所からがうちきつかに雪を掻き
 まつからがうちきつかに雪を掻き
 雪降れば声とさしたり京の寺
 雪やなと見上げる顔に降りかかり
 思い出の中でほほ笑む雪だるま
 故郷は深雪の中にうずくまり
 雪山を戻りミニスカートに着替え
 白山の雪にせきたてられて母
 豪雪地家族五人にスコ五丁
 初雪を帽子にのせて下校の子
 校庭へどっつきり坐る雪だるま

佳
 父を恋う子の雪だるまヒゲが生え
 雪の道紅手袋が一つ落ち
 クレオレで雪を五色にかく園児
 泥土もまじる都会の雪だるま
 薪積んで沢庵つけて雪よ來い
 雪衝いて着けば箒で叩かれる
 松明がスペルを描く雪の肌
 長靴は雪の深さをたしかめる
 駅長が雪のホームに一人立ち
 雪おろし女の声も混りいる

人
 雪の道大きくあけて客を待つ

鎮也 光道 みのる 芳仙 一郎 魚山 静枝 摩耶 七面山 七面山 宗太郎 宗太郎 佳女 佳女 梁水 代仕男 双葉 頂留子 秋女 秋女 祥月 幽谷 章雅 秋女

雪の道母一点となりて佇ち
 天
 寒くない顔がならんだ雪の道
 旭峯
 輪が娘成人す
 成人式の振袖姿へ雪が舞い

難題
 有働芳仙選

難題の酒と分って酔いきれず
 久々の故郷へ難題もって行き
 腹芸とやらで難題あしらわれ
 難題を断る腹で待たしとき
 難題を電子計算機に頼り
 難題のケチが意外な金を出し
 海千の女将に難題かわされる
 難題となれば他人の顔となり
 当選にはや難題を持ち込まれ
 難題へぬらりくらりと政府逃げ
 難題へ昔は直ぐに腹を切り
 難題を解く鉢巻へ熱いお茶
 難題を残したままの遺影なり
 じぶんではないから難題おかし
 お礼詣りなど匂わせてゆすりに来
 難題へ妻すばらしい知恵を出し
 難題へ頭かかえただけのペン
 難題も解けて煙草の輪も軽い

無閑 白扇 眺明 初甫 十九平 梁水 惠二朗 柳子 いさ夢 慶彦 和友 無聖 紫 惠子 素身郎 代仕男 一進

第百九十九回(復活第四回)

大萬川柳

「乗り気」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 六百四十句
 入選 七十五句

堺 一扇
 大阪 あいき
 断るに惜しいが乗り気になれぬ縁

笠岡 遠二
 よき父の再婚息子が乗り気

京都 杜的
 肩組んで乗り気同士の唄になり

堺 一舟
 写真では見られぬ好さが乗り気

竹原 箒居
 大方の乗り気へ無口ついで行き

富田林 花梢
 円陣が乗り気になったとこで売り

東大阪 清人
 音感教育パパママだけが乗り気

倉吉 弘朗
 頑固さが乗り気客を又逃がし

高槻 静馬
 親ほどに娘乗り気でない見合い

岸和田 千舟
 スカウトの積んだお金に親乗り気

岡山 十九平

ドル箱が乗り気で一湯千里なり
 倉敷 千翁

説得が過ぎて乗り気が薄うなり
 岡山 白扇

片ちんの下駄が走ってゆく乗り気
 岸和田 きさ子

みな乗り気らしみぞれを突り寄り
 大阪 形水

銀行にかぶり振られてきた乗り気
 小松 宗太郎

すぐ倍にも土地こっそり見に出
 鳥取 秋女

真先に乗り気父が風邪をひき
 大田 軒太楼

あの話その後どうかと乗り気らし
 大阪 小路

建て売りへ乗り気で妻を連れ
 大阪 阿茶

乗り気ならパパが貰えと受けつず
 堺 天笑

デボチンへ眼鏡を上げて
 伊丹 千尋
 要るものは要ると親父も乗り気

門真 鉄児
 聞いているうちに乗り気の膝にも

篠山 与志
 乗り気した図面大工が来て笑い

倉敷 素身郎
 どう見ても頼りになぬのが乗り気

笠岡 要次
 家中が乗り気額を突き合せ

玉島 孝市
 再婚に乗り気お酒を飲まぬ人

岡山 藤波
 乗り気ではとわかって話題変え

金のないのが二次会へ乗り気なり
 広島 露声

今更に乗り気へ冗談とも云えず
 鳥取 芳子

乗り気になったかソロロ持って
 大阪 徹也

気乗りした影が終ったお茶の味
 鳥取 帛山

誘惑と知らぬ乗り気娘を論し
 鳥取 忠志

母ちゃんが乗り気であと父弱し
 篠山 可住

母と娘とてこれこれに乗り気
 下関 木石

乗り気ではないが従う多数決
 下関 木石

乗り気ではないが立てねばなぬ義理
 倉吉 梁水

玩具部へどうもパパが乗り気らし
 膝進む話へ妻が袖を引き

すばらしい 着心地



蝶矢 シーツ

真先に社長が判を押す乗り気
 入札へ乗り気同士が話し合い
 藤井寺 吸江
 米子 瑞枝

助太刀の妻へ保険屋向きをかえ
 エプロンを脱いで乗り出すよいか
 大阪 痴亭

商魂は乗り気かくして生返事
 一見に如かずと乗り気腰をあげ
 大阪 弓彦

反対に話せば乗り気になつてくる
 損得は別メンパーを見て乗り気
 羽曳野 幽玄

勘どころ突いて乗り気にさせる肚
 乗り気はまもなくお義理のプラカード
 大阪 文秋

家付きで乗り気ババ付きで嫌気

富田林 きはち

まばんを立てる乗り気を見せはじめ
家中で乗り気の僕を危なかり

宝塚 無聖

威勢よく諦める乗り気の帯の音
奥様のしゃべり上手について乗り気

大阪 柳志

そろばんに合うと見たのか腰を
二人は食えろと聞いたら乗り気
頭金聞いて乗り気を勘づかれ

大阪 水客

乗り気になっているのは総理だけ
そのくらしいの金ならと妻子の眼
傘借りて父も一緒に行くという

尼崎 利美

本人は乗り気どころかまだねんね
乗り気だときめて仲人先走り
本人の外は乗り気で涉らず

半分は母も乗り気で会うてくれ

尼崎 秋

月賦でよいと乗り気をキヤッチ
大阪 文秋

乗気ではないが受けねばぬ役
尼崎 秋

乗気ではなかつたといふ負け惜し
橋本 木魚

銀行員と聞いて母はもう乗り気
鳥取 一風

いい話乗り気になれば金が要り

人ノ句

ほんまは乗り気まごとはかり云い

倉敷 千翁

家中中乗り気の方は断られ

高石 好郎

妻乗り気はや大安の日をさがし

天ノ句

折角の乗り気へ電話腰を折り

仙台 光道

大萬ベストテン(一月現在)

(同点の場合は投句先着順)

一 素身郎 九、〇 倉敷

二 好郎 八、五 高石

三 弓彦 七、五 大阪

四 光道 七、〇 仙台

五 水客 六、五 大阪

六 秋女 六、五 鳥取

七 文秋 六、五 大阪

八 清人 六、五 大阪

九 十九平 六、〇 岡山

十 柳志 六、〇 大阪

十一 ゆきを 六、〇 宝塚

十二 吸江 六、〇 藤井寺

十三 千代 五、〇 米子

十四 代仕男 五、〇 平田

十五 形水 五、〇 大阪

十六 ささ子 五、〇 岸和田

十七 照路

四、五 岡山

十八 静馬

四、五 高槻

十九 無聖

四、〇 宝塚

二十 利美

四、〇 尼崎

二十一 慶彦

四、〇 鳥取

二十二 日満

四、〇 西宮

二十三 多久志

四、〇 大阪

二十四 継之助

四、〇 堺

二十五 草春

四、〇 倉敷

二十六 千翁

四、〇 倉敷

大萬川柳

も四回目と

もなれば十

傑がほとん

ど同人にな

ってしまっ

たようだが

古豪おそれ

二十七 瑞枝 四、〇 米子

二十八 弘朗 四、〇 倉吉

「素通り」 五句以内

締切 二月二十日 厳守

「悪酔い」 五句以内

締切 三月二十日 厳守

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五十六

川村好郎



優雅な書き味

タチカワペン

☆ 柳 界 展 望 ☆



興・富柳會・若芽三川柳會「龍泉寺山門」吟行の記念撮影(笑痴撮影)

(橋高薰風担当)

館で、吉備団子句集出版記
念を兼ねて開催、万古、好
啓見氏ら多数の寄せ書きを
頂戴した。

▼番傘川柳社は昭和四十

三年度新役員の主なものを

次のように決め、創立六十

周年記念行事などの力強い

推進力にされる。主幹・近

江砂人、幹事長・大田佳凡

副幹事長、青木三碧、磯野

いさむ、古下俊作。

▼平安雜詠選者は二月号発

表分から福永清造氏退き田

中秀果氏が担当されること

になった。川柳教室は末次

笑雪氏が受け持たれる。

▼故脇田勇氏（大阪市同

人）の告別式に寄せられた

香料は、大阪市立あいりん

小・中学校後援会、キンダ

ーハイム両施設に寄付され

た。

▼かほる会七福神詣吟行会

は一月七日正午から三国神

社参詣の後、堀切高蒲園内

の静観亭で句筵が開かれた

▼一九六七年柳都賞受賞作

家は、同人、佐藤川太郎、

本間美千子、会員、藤巻昌

子の諸氏と決定した。遺髪

とも思っていないヘアピ
ス、川太郎、とのひらにの
るの亡父と初恋と、美千
子、朝顔に奥歯のような葉
がふたつ 昌子。

▼札幌川柳社創立十周年記

念川柳作家合同自選句集の

作品募集要項は、一、新作

旧作を問わず一口十句（何

口でも可）二、用紙自由、

一口十句に氏名（雅号）都

道府県名を記入。三、一口

三百円（掲載誌星）四、昭

和四十三年三月末日締切。

五、六月号を川柳作家合同

句集号として発行。六、札

幌市水車町二丁目石山アパ

ート嘉瀬信彦宛。

▼佐野ト占氏（八代市同

人）は昨年十二月一日、八

代市長より永年の観光事業

の功労者として表彰を受け

られた。身体も壮健なので

まだまだガン張るとのこと

▼川柳「リーフ」一号が十

一月二十日、金沢市玉川町

七の七杉本方川柳甘茶クラ

ブから発行。

▼川柳ノート一号は十二月

十五日京都市中京区壬生辻

町三六田中博造方川柳ノ

はげぬ・かぶれぬ白髪染

容理えま男

一丁南裏町田寺線状環

トぐるーぶから発行。平安
同人の若手七名の作品エッ
セリ集、実費百円で郵送し
てくれる。

▼尾村馬人著川柳句集「庶
民哀歎」が十一月十二日東
京都千代田区富士見一の七
の二構文社内詩歌文学懇話
会から発行された。

前田雀郎氏に師事し、作
句はまさに命がけとなった
一時期もあり、プロレタリ

ア川柳の線にまで進んだ著
者の経歴と作品は味わい深

▼生々庵主幹は川上三太郎
氏、榎本聡夢氏と交替で山
陽新聞の柳壇を担当される
ことになったが、二月の題
は「テレビ」である。

▼東野大八氏（岐阜県）は
一月四日本誌のため取材に
大阪へこられ、大井正夫氏
とご一緒に一三夫氏宅へ電
話されたが、二月号の編集
中で声だけの対面となった

▼川村好郎氏（高石市同
人）は一月二日金光教乙島

教会で三林坊・千翁・里風
諸氏と歓談された。千翁氏
から「好郎先生を迎えてす
ばらしい集いでした。四月
二十八日に玉島の十周年大
会を開催することもあり今
年は川柳年となりそうで
す」

▼備前川柳社の忘年句会は
十二月九日浜田久米雄居で
開催。

▼川柳岡山社の新春川柳大
会は一月二日岡山県遺族会

いものがある。「愛されぬものは淋しい鼠の眼」「大砲のさきから税をブツ放し」

▼金八会一周年記念川柳作品集が昭和四十二年十一月発行された。金八会(最初の句会の日が金曜日で八名集った)の指導者中尾藻介氏をはじめ三十一名の職域川柳の題詠句抄である。

▼阿部佐保蘭氏(東京都)は十二月二十日六名の川柳人と羽田を発ち川柳親善の旅にのぼる大森風来子氏を見送られた。

▼諫早川柳文化会小浜一泊遠遊作詠会は十二月三日、四日望洋荘温泉センターで

開催。特選賞受賞句は「ボナスを嗅ぐようにして来る電話 橋口公輔」「円満さ買われてかむる角隠し 川岡靈眼子」「三味線を泣かして帰すかくし芸 庄司万象」なお、諫早市新春川柳大会は一月二十一日天満町公民館で開催。

▼富士野鞍馬氏(東京都)は十二月十四日、ロータリークラブで古川柳と義士討入りの講演をされた。

▼八木摩太郎氏(堺市同人)はある製菓会社からの依頼で、菓子の名付け親となられ登録商標にもなったが、ご本人には最初の最後のことであろうとの由。

昭和四十二年年度版 (三百円・千二百円)

自選作品集 「吉備団子」 十八集

服部十九平氏の序文には三五二作家の出場とある。重ねて十八回はこの作品集の人氣を物語るものである。

発行所 岡山市内田三〇三

川柳岡山社

振替岡山四〇二五番

▼山田季賛氏(高槻市同人)は昭和四十二年度の句会出席数、二百五十三回という記録をたてられた。大鉄句会の皆勤賞を受賞された。また西国三十三カ所巡りも、十二月五日、観音正寺、長命寺、十日は岐阜県の華嚴寺、十九日、三宝戸寺、上醍醐寺、岩間寺、二十六日は穴太寺、善峰寺へと巡拝された。

▼那谷光郎氏(加賀市同人)から「十月の半頃に倒れてから未だに起き上がることも出来ず、右手麻痺のため投句も不可能です」速かなご快癒を祈っています。

▼宮口笛生氏(奈良市同人)は栗津温泉対岳館から十二月十二日付けの句信を下された。「雪見酒 昨日の雪に今日の雪」

▼岡田拳法氏(普通寺市同人)は退院は桜咲く前後の予定だが、体ならしのため自宅への外泊日数をふやそうと思っていると、またすでに就職も決まった由の嬉しいお便り。

▼河相すゝむ氏(西宮市同人)と薫風は、元日、近江砂人夫妻、松本波郎夫妻、増井不二也夫妻の滞在先、六甲山頂の凌雲荘へ少時訪問、浩然の氣を養った。薫風は七日玉島新春句会に出席、同地柳人と交歓した。

▼山川勝子さん(高知県)から「二週間ばかり旅行をしていました。高雄の紅葉も美しいと誘われ飛行機でいきました。飛ぶ間は四十分は、二週間も遊んでしまつては、別に飛ぶ必要もなかつた」と大笑しております。

▼国弘半休氏(下関市同人)「十、十一月の二カ月に亘る土曜、日曜は穰ぎ時で句会も何もほったらかしで観光の明け暮れでした。今年の八月十一日まで六十一才で通せませうと、それまでに句集を出さうと編集に大わらわっております」句集の発刊を期待いたしております。

▼行天千代さん(貝塚市)は病弱の夫君を助けて店を切り回しながら、少しの暇に作句を楽しんでおられると。

▼弘津柳慶氏(防府市同人)

▼河相すゝむ氏(西宮市同人)と薫風は、元日、近江砂人夫妻、松本波郎夫妻、増井不二也夫妻の滞在先、六甲山頂の凌雲荘へ少時訪問、浩然の氣を養った。薫風は七日玉島新春句会に出席、同地柳人と交歓した。

▼エスエム工業KK(大阪市)から職場川柳句集「清流」が発行された。榎本聡夢氏が指導にあたっておられるが、本社同人新谷笑痴氏なども参加されている。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
多々薬品



アリス

新市街もうチンピラがノシ歩き
新市街手のつけられぬ地価となり
新市街掘れば古墳に突き当たり
新市街歴史を用捨なくくずし
恒明 柳生 笛生 一三夫

兼題「名門」

北川春巢選

名門を親の犠牲で出てしま
東大へ一人送れば名門校
美めば愚痴も聞かせる名門
名門と言ふ幻にしがみつ
名門を遠に捨てての好き同
はやされた名門校で留年し
名門の生まれを憶む霧の夜
名門の正妻らしいのをもた
名門の端くれ屋台でする自
名門に生まれて個性なき育
進学に名門校へ屈きかね
名門の土蔵で家宝ほっとか
名門をかきていたか寄付の
名門の顔がきいたか寄付の
名門も全学連に牛耳られ
名門をかしく和服物仕立て
斜陽族ふりむくときにドラ
名門の奥にもいざこざつま
純情な恋名門に引割かれ
元子爵さんだとは八百屋知
名門の夫婦喧嘩は音もなし
名門のさすけが気高くおち
中共へ行って名門それおち
名門の愚息羽田で乱闘し
名門のシゴキ新聞種になり
明治一〇〇年名門に褪せた
落ちぶれて名門汗の味を知
名門の出で週刊誌賑あわせ

公輔 白柳 雄峯 好郎 章雅 梅志 喜醉 六龍子 判志 白溪子 宏さむ 綾女 生々庵 舟遊 栄 操 生々庵 静馬 六龍子 梅志 多志 没食子 六龍子 多志 春巢

歌って踊って
新春懇親宴

柳柳塔座初春公演

新春句会がおわると懇親宴にのこる四十余氏が総がかりであつたといふまに舞台を句座から酒席にかきてしまふ。

主幹夫人小石さんが湯のみなどを洗われると、それとばかり女流作家の方々もかいがいていくお膳の用意。男性群も家庭の奥さまに見ていただきたいほどはたらしきぶりだ。

大萬特製の折り詰めは舌つみきを打てば手が鳴る心が踊る。前座にはもったいない村田瓢太氏の奇術がまずとび出す。

「うまい、」それもどおり、瓢太氏は「関西奇術教室」の校長サント。二つ目は前年度の句会賞作家、羽原静歩氏の暴力節。

静歩氏の指名でこれまた前年度川柳塔賞華優秀第一席の姫路の麗人前田美巳代さんのおける。指名は白柳氏にラッパ節を、さらに中島小石さんにさびのある小唄を、ともにすごい受けようである。古方氏、生々庵主幹の登場から、お目である福井野迷路閣下のご出馬となる。カシラ、中ッ、三勝半七のミニ浄瑠璃に大喝采。

さて、中入りのトップは梅志氏の謡曲、これはホンモノだ。静馬氏の黒田節と久しぶりご出席黒川紫香氏の宝塚のモン・パリには全員大合唱だ。岸和田の女王高橋操子さんから名人西尾菜氏にうつる。ご存じアリアンが手拍子に乗るのと不朽の名作舞踊がステージいっばいに笑いが集る。

宮尾あいきさん、本庄金三氏、天正千緒さんは「懐つメロ」を掲げて登場。若さで美貌が売りものの加藤貞山氏が故郷鳥取の正調貝殻節を披露されると期せずしてアンコール。もう出る時分というご期待は、菜氏のアリアンと共に有名な北川春巢氏の「ゴム臭い」である。座ブトン抱いてすくくと立てば、大向うから「待ってました」の声がかかる。正に極め付である。それを与呂志氏がその至芸を受けついで「ゴム臭い」の二代目が披露された。これで賑やかたい大喜利に代る予定だったが、このつぎがたいへんで、えらい大物がとびだした。

岸和田の葛城伊三郎氏の「酋長の娘」がそれである。寒中にハダカ、舞台をせましと踊る酋長の娘は珍中の珍。かてて全員大合唱は正に天下一品。

「参った」だんじり以上の岸和田の名物だ。時間に制限があり、しめくくりとして鉄児氏がお得意の先代羽左エ門張りの「玄治店」を名調子に乗せて川柳塔座初春公演をめでたく打ち出すことになった。時に六時半。西田柳宏子氏の水際わ立った司会ぶりも立派な演技の一つとして、きょうの思い出にのこるものである。

(F)

直原玉青著

創元社出版
価 二千円

「新しい南画と
俳画の描き方」

本社でも取次ぎいたします。

水谷鮎美追悼句会

共催
川柳塔社
ふあうすと川柳社

故 水谷鮎美追悼句会は昨年十二月十日尼

崎労働福祉会館三階中ホールで開催、折りからの寒波襲来の寒い日にもかかわらず、故人を悼う各地各社の柳人多数参集、特に岡山より大森風来子氏其他のご参加は故人にとってどんなにか嬉しく意識深い事か、其他遠くは青森、名古屋、横浜、西は岡山、倉敷、鳥取徳島外二十二名の投句参加あり盛大におこなわれ、定刻十三時には中央演壇前に故人を忍ぶ遺影を祀り、遺族長男及び未亡人の着席と共に、ふあうすと川柳社の海士天樹氏の司会で開催。

文遊三十有余年の私の挨拶、続いて追憶談に移り川柳塔社清水白柳氏の故人の句を通じての追憶、また道田葉平氏の思い出、特に川柳岡山の主幹大森風来子氏の故人との交り、岡山に於ける鮎美豆萩氏との思い出話しなど感銘ふかく、吉田喜佐雄氏の朗詠は故人の代表作、「君雲を話す心になり給へ」を声高々と吟じ追悼会を終り、句会に入る。兼席題共故人の名水谷鮎美と日頃好んで吟んだ雲椿心灯の選句発表披露があり、十七時三十分、

せんば川柳社伊藤静夢氏の閉会の辞での散会時に暮色蒼然として窓に迫り寒さ一入を。
ご参会の各位やご投句の皆様ありがとうございました。

(長谷川三司)

兼題「水」 菊沢小松園選

花活けの水足してから旅支度 水客
水のんで乞食ゆつくり村を去り 静夫
水の変態このあたりからしぶき 青二
水筒の水で別れた壕の中 栄一
子に見上げられて水飲む咽喉仏 不二也
魚屋は手持ち無沙汰の水をかけ 静馬
お茶汲めばココも塩素の臭う水 太路
人間の智慧の浅さへ水笑う 光女
酔いざめの水は要らないホームバー 武夫
交番で貰うコップの水でさめ 禿夫
水すまし流されまいとするあせり 光夫

兼題「谷」 田中好啓児選

谷の徑木の匂いする人に会い 千尋

ダム工事谷の飯場へ便りくる
陽は谷へ落ちて山陰線の貨車
谿谷で撃たれて雉のいさぎよし
谷底の小屋に雪人も居ず
測量器が肩に食い込む谷のぼる
トンネルをでて谷川の生きている
谷越えてくる鐘旅を速くする
もう谷もしまいか柿に柿残る
新雪がもう谷にきて菜を漬ける
選者吟
三人を二人にしとく谷下りる

兼題「鮎」 正本水客選

青くさい役人誘う鮎料理
故郷が展らけて鮎の味がない
渴水期鮎古こけへ背のびする
鮎の背の青さ鎮りゆく心
放流の鮎揆刺と放なされる
鮎画いてみたし水色などを買う
泳がねばならぬ囹の鮎である
骨抜こかがぶりとたべてみよか鮎
庖丁を許さぬ鮎の姿かな
友釣りの鮎人間に似ておかし
選者吟
鮎の骨仕合せうすき指と知る

兼題「美」 鈴木九葉選

美術館門は明治のままにして
グラビヤに美を見せ愛にある打算
秋のいのち短くもみじいまを燃え
スモッグがうすれ銀杏の黄がみこ
美しい夕焼け妻との旅終る
好啓児
之日出

美しすぎて誘惑とはならず
鯛釣って瀬戸の美しさを知らず
美しき言葉待ちおちりランブの炎
讚美歌のゆすぶる聖明天を指す
冬のバラ美しい字の湧く如し

選者吟
二女三女美しき名をつけし父

兼題「雲」
古下俊作選

白雲悠々答案は白紙なり
鉄塔の商魂雲に撫でられる
生きて居る何んとかなるさ雲流る
雲ひとつばかり流浪の旅つづく
御来光の雲突き抜けて突きささり
寒む空を少しゆがめて飛行雲
朝々の雲の機嫌を見て出かけ
銃口の先に動かぬ雲一つ
雲だんだんわがまぼろしの顔つ
雲一朵従えお月さまの旅

選者吟
台風が近い悪魔のような雲

兼題「椿」
岡橋宣介選

玄関に椿一輪客もなし
窓閉めて何にする人ぞ椿咲く
椿いちりん人待つ部屋にしてく
暖房がきいて椿の画も美しい
落椿基地への細い路をぬけ
椿咲く人重厚に会釈する
紅椿ぱとりと写経渉らず
それまでのいのちを抱いて居る椿
落椿米軍の基地あるところ

古方 秀果 光穂 静夢 千尋
古方 秀果 光穂 静夢 千尋
古方 秀果 光穂 静夢 千尋

原始林椿が落ちただけの音
美しく無沙汰を詫びて椿餅

選者吟
兼題「心」
西沢青二選

パーマ出る心がすでに明日である
朝の一言を心の負債とし
浮気とは今急カーブした心
さざ波が心をよぎる日の無口
満ちたりた心のそこにタイル貼る
屈辱の心うつもく花を購う
倅せは花のころもに斑がない
べつべつの中で三人合うてわかれ
夜を覚めて悪魔と心遊ばせる
離れたり触れたりとけたりして心

選者吟
故人ある日心の中へ来て議論

二月の句会
★原稿は月末着便まで
★書式は本誌のように楷書
で書いてください。
——編集部

<p>玉造川柳会 (大阪市) 二月十日 (土) 六時 夜明け、柱、ウイंक 所 玉造交差点南一〇〇米 大阪信用金庫</p>	<p>若芽川柳会 (堺市) 十一月一日 午後六時 人ごみ・寒がり・床柱 所 阪堺線神明町下車・九 間町山ノ口筋 八木摩太郎宅</p>
---	--

兼題「灯」
堀口塊人選

冬の灯がボンボンと川の巾
盛り場に嘘の上手な灯がともり
漁火のゆれに政治の陰がある
わが影におびえ女が灯をくぐる
ケーキの灯吹いて子供がかしこ
ローソクが凶相の掌をそっと出し
冷えて行く師走のビルに灯が残り
灯を消して今日一日を過去にする
その日から心に灯る人となり
灯のいろも道頓堀と新世界

選者吟
★中島生々庵著「川柳講座」郵券五十円封入
の方に進呈。お申込みは本社へ。

兼題「燈」
南大阪川柳会

時 二十日 (火) 午後六時
エリート、知恵、真
似、道具
所 トロバス線国分町東三
〇〇米文秋居近く
兼願寺

<p>南海川柳会 十五日 (木) 六時 マイカー・あきらめ・ 巡視 所 ナンバ高架下 親和クラブ</p>	<p>堺川柳会 二十三日 午後六時 香水・机・通天閣 所 堺市九間町山ノ口筋 阪堺線神明町下車東へ 二丁・八木摩太郎宅</p>
--	---

○ はなやいだ舞妓の京の事始め
来年もよろしゅう祇園の事始め
事始め祇園は景気の餅を掲ぎ
つけ馬を連れて帰ったXマス
七面鳥厄日と知らず肥らされ
みおつくしこれから飲むXマス
板前の年期はふぐを薄う切り
ふぐ提灯見て嫁はんを思い出し
ひれ酒も飲んで食通いいきげん
二次会は気の合う同士ぶぐ料理

交通局句会(大阪市) 児島与呂志報

もうけてもうけて財布を奥深く秘
街路樹に蟬が鳴いてるのもアペノ
うるさいな隣りの子が泣く蟬が鳴
嫌いでもないのに好きを云い切り
生きるのもじやまくさいも楽隠居
あと味はともかく結局飲みなおし
女房は後姿で意地を張り
作文に書くぞと末っ子脅迫し
安月給机上旅行で夢満し
入所して四日そろそろなまけ出し
人生のきびしさ日焼けのまだ足
暁に個性隠かす石畳
嬉しさを顔で隠し
一行の記載は逢うた夜の日記
アベックでパパとママとで夜店
浴衣がけ夜店の明い風にふれ
忘却と記憶の谷で試験受け
記憶力つける薬と息子飲み
借金を忘れて貸金おぼえとり
絵日記に旅の記憶を書き記し
恐ろしい記憶に夏のキノコ雲
轢き逃げを三才の子に記憶され

晴 夫 甘 生 夏 風 秋 郎 草 右 落 路 愛 食 子 竹 論 幸 男 緑 雨 春 巢 淡 舟 鉄 兄 茶 坊 季 贊 我 勝 幹 志 雅 巢 正 則 喜 舟 喜 助 一 歩 綿 実 茂 松 武 清 欣 也 文 泉 笑 風

悲しさの記憶月日が割いで呉れ
大正生れそろそろ一番古くなり
意見する親も若気の過去を持ち
施設出も高く個性を評価され
夏バテを矢麩と薬で攻めるなり
朝顔のつるが器用に逆らわす

○

話好きビールを水にしてしまい
肝臓と酒の話が同居する
胸に一物あつた妓の飲みっぷり
料理にかけた時間が妻の味
割勘で小型拾った俄雨
スタミナも年々減つて角が取れ
市の赤子みんな市電の故にされ
炎天と斗う蟻へ失意の眸
直角のビルに銀杏が美しい
直角に切つて一輪車の得意
相談に乗つてもくれずただ叱り
悪童の相談の畑にあり
相談を受けた男の土性骨
肉親へやはり相談持ち込まれ
ハンドルを交わらばたの初免許
ハンドルに運命かけたグランプリ
ハンドルの持たせば屋上離れない
白バイの側ハンドル神妙さ
ハンドルに今日も無事故の礼と云
それぞれ個性ハンドル握る位置
童謡はあかねの空へまだ続き
蟻武装して引きあげの列作る
直角に泥棒猫はかけ上り

埋立てて去年の海がもう見えず
お月様に云い訳をしても花盗人
岸和田うしお川柳会 上林加仙報
多佳子 青子

加 歩 一 誓 二 漁 人 甫 久 路 与 呂 志

春 巢 季 贊 鉄 兄 助 みのる 茶 坊 漁 人 六 竜 史 隆 則 正 升 醉 松 秀 峰 雅 巢 喜 醉 德 松 力 泉 本 蔭 棒 楽 々 静 々 助 天 樹 与 呂 志

大家族パンとこはなが同居する
戦争に負けてこの子はパンが好き
パンかじる孤独がつかいひとり者
パン不服運動場に吊るされて
フラッシュへ罪の意識もない手錠
物に目に見えるおもちゃが誘う罪
物価高去年の家計簿を出して見る
商談へパン一きれの胃が重い
パン食を三日続けた嫁の留守

高知川柳社(高知市) 川竹松風報

初孫を抱いて過去はもう忘れ
初産へ母の臆になつて抱き
抱き合つたままの惨事を追々カメラ
立ち話し笑えば抱いた子も笑い
抱きぐせをつけたと嫁に叱られる
初孫を抱けば白髪が苦にならず
云いわけを聞いて刑事の眼が光り
云いわけに汗をふいてる二日酔い
云いわけを聞いてるうちに眠く
云いわけを母は善意に聞いてくれ
エラーかさね妻に云いわけを利
まだ脈のある云いわけの無理を

武 司 柳 水 桂 花 窓 雄 勝 志 昌 雄 伊 津 美 知 松 花 竜 文 子 蟠 蛇

「川柳雑誌」バックナンバー。川傍柳
初篇研究」掲載。
「川柳塔」バックナンバー。第二号から
近刊まで。(創刊号は絶版)
須崎豆秋句集「ふるさと」掲載の「川
柳塔」

路郎著「新川柳鑑賞」摩天郎著「堺の人
々」薫風著「れもん」ご愛読を乞う。

言いつけより早いゲンコツ飛んで、飛ぶように帰つて来るママいなきつかけは飛をハンカチまじった団体の圧力政治も曲がめられ団体でどつと繰込む甲子園団体の中に不自在なしの顔なじみやせがまん不目かしの一人も女房が何んじやと二次会つと行き瘦我慢すつからかんにたかられる爪染も持たぬ釣居のやせ我慢爪染めた手に釣銭横どられ中風へ渡すに困るつりを出しあたたい手で釣銭呉れる焼芋屋役人はつり銭邪魔くさそうに出し

富柳会 (富田林市) 阿部柳太報

断りに来るタクシーは辻で降りタクシーに乗つたつもりでへきああの男がタクシーとはテートの夜蒸発する気タクシーゆれ恋もその瞬間とらえたカメラ賞に入り瞬間のアウトセーフで血を流し遠雷のその一瞬旅の子を思うつづの瞬間母の顔浮かび猫の手も借りたい今日を句で忘れサラリーマン今日も惰性の靴みぞ首かけて払う約束今日となりめしだけの用事で今日も日が落ちる。今日の事採み消しにする金包み新聞で見れば立派な犯人の顔社説かく人間像も想像し青空へ爆破きこゆるも造像し

天笑美 茂柳笑 双楽 柳久 左馬 静馬 花梢 好春 摩天 笑痴 痴亭

東雲松 笑痴 柳太 花梢 美代 八重子 六龍子 栄一郎 尚史 克忠 風来 摩天 宏月 紅月 真理 白柳

貧困の政治台風のなすがまま台風に打つちやりのつた有難さ台風にのつく妻のノイローゼ台風直撃夫婦喧嘩を忘れさせ台風に町内おなじ音をさせご好意で泊められてぬれにくそつとそつとしてる好意の手合御好意のクリーム溶けた頃に喰い虫の好くお方で噂気にならず人なめたよにゴキブリ素通りして執念は虫もころさぬ顔して退職へ虫も別れを告げるよう気苦労が多いとこほしよくねむり気苦労を女房一人のように云い気苦労した母を聞んでもるうなりホステスの手帖へ登録されて居り毎日が手形期日という手帳

川柳たましま

水粉千翁報

むらさきの帯あきらめの金をはせ生さる道ゆきつまりまたゆきつ身の上をそらす尼僧の片えくぼ肩書を捨てて浮世の迷を知り愛憎の去来へ白い裏い鳩妻にすまない空想もあり隙間風行きつ戻りつ鼻緒ゆるんだま柔肌を憎む尼僧へ見つからざる口実が行きつ戻りつ夜つからず罪を知る窓のあかりへ又戻りさまよつて男に何の策もない憂悶の果てを尼僧の珠数光る日記帳このあたりから隙間風

千翁 三林坊 惠二朗 梁水 里風 貴志朗 三辛堂 扇水 柳鶴 林草 鼓草 旭峯 八笑人 梁水

肩書が通るほんにとせまいとこふるさとのしき居の高さを戻り行きつ戻りつ迷うつ心へ天の声人信じ行きつ戻りつ白い杖漫才へ尼僧やっぱり笑いこけ尼僧いまマンガ読んでる午後の雨肩書がものを云つてる黙つてる

明和研究会 (西宮市) 樋口舟遊報

知恵の輪に女心は勝負する霜柱さく前夜の妬心踏みしめる退院の前後の星が光つて張りつめた心家庭の灯にゆるむ魂がうえてリンゴを丸かじる菊花展出る女に後姿あり群雀の輩にいつかさていたベトナムの炎青年虚空つく波猛り密航の背に散る夕陽子の為めの馬車馬だった白髪抜く家博会議などとうるさい小学生感謝の日車窓へ脱殺機が動き晩秋の冷え暖房のコマーシャル楽しきは嫁の鼻唄聞く家庭

ワイロー社句会 (ハワイ) 築山快夢遊

運命を神に預けてよく眠り運命に負けて人間蒸発し運命と云えど儂なく事故で逝き運命を背負つて小鳥は籠に生き運命のいたすら二人を結はせず運命の蟹にも似たり我が住居お子さんがあるかと家主先に聞き運命論末は信仰に誘い込み貸家などあつて静かな老夫婦

千翁 寬子 旭峯 扇水 三林坊 柳風 童夢 静水 眉子 真知子 舟遊 良馬 日出男 康徳 中性 美知子 正祐 正衛

川柳塔社二月句会

日時 2月5日(月) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

柳 話 清 水 白 柳

兼題 「スイッチ」 西田柳宏子選

「見せかけ」 金井文秋選

「物云い」 小川恒明選

「住所録」 黒川紫香選

席題 三題 当日発表 各題三句

会費 百五十円

★ 投句だけの方は切手五十円封入

大阪市南区鰻谷仲之町20
川 柳 塔 社
電話大阪 43985番

3月の兼題 「公法」 「陽当たり」 「害心」 「ブーッ」

・ 2 D K ・

★二月といえは節分だが、川柳家の「鬼」はまずボツか。そのボツを追っばらうのは豆だが、ではどんな豆かというと、マメに作句するよりテがなさそうだ。
★印刷機の故障で新年号の表紙はヒドかった。責任校の朱もそのままが多かった。申しわけない。
★ある人から、「お宅は三歳とは見えない発育ぶり」とほめてもらったが、冗談じゃない、来年の一月号で五百号になるのですぞ。
★四六〇号まで続いた「川柳雑誌」を改題した「川柳塔」であることをわれわれも再認識したい。句のうえにもおいてみた。
★清水白柳氏が二年の月日を費やし、明治百年を記念して「川柳明治百年」を執筆中である。
★本誌のレベルを上げるのは同人諸氏の筆力以外なものもない。佳句と好原稿をお寄せください。
☆一月は元日から五日まで編集で足ど。賀状を出せたとこ、出せなかったとこ、深謝。
(不二田一三夫)

集

募

四月号発表表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵選

近作柳樽(10句) 若本 多久志選

課題吟(各題5句以内)

「筆」 久米 奈良子選

「花 見」 河原 みのる選

「コーラス」 浜 畑 胡 蝶選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

五月号発表表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵選

近作柳樽(10句) 若本 多久志選

課題吟(各題5句以内)

「心 配」 遠山 可 住選

「代 表」 田中 蛙 眠子選

「 駅 」 植村 客 遊子選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百二十円(送料六円)

半年分 七百五十円(送料共)

一年分 千四百四十円(送料負担)

昭和四十三年一月二十五日印刷

昭和四十三年二月一日発行

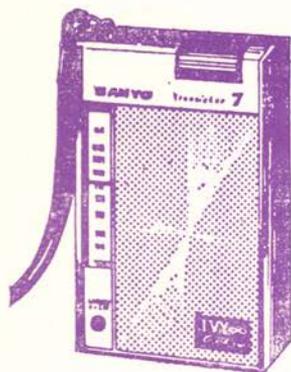
大阪市南区鰻谷仲之町二番地

編集兼 中島 蓬 太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

大阪市南区鰻谷仲之町二番地

発行所 川柳塔社
電話大阪・二七一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番



〈カドニカ電池〉

永久電池内蔵

7C-615型(7石1バンド)

現金正価 5,400円

6回正価 5,670円



サニヨーカドニカ

三洋電機株式会社

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストア

戎橋
大阪

味に輝く 北極星



戎橋 北極星 (611) 三三七
三五五

味堂やわらぎ ⑤ 二五九三

結婚式場 やわらぎ殿 五北極星階

曾根崎 北極星北店 ⑧ 七六

永楽橋 やわらぎ ⑦ 七六

野田阪神 別館やわらぎ ⑥ 六二

野田阪神 パンヤの食堂 ④ 三四

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年一月二十五日 印刷
昭和四十三年二月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 二月号



気品あふれる シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。その秘密は、東レテトロン繊維の動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レテトロン (ポリエステル 100%)
オルテロン
スーツ・スラックス
Toray 東洋レーヨン株式会社

定価 百二十円 (送料六円)